令和元年度

福島大学附属四校園ＫｅＣｏＦｕ推進協議会

活動報告書

～附属四校園が目指す「社会に開かれた教育課程」Ⅱ～

福島大学附属四校園ＫｅＣｏＦｕ推進協議会

目　　次

Ⅰ　福島大学附属四校園ＫｅＣｏＦｕ推進協議会　方針 ---------- １

Ⅱ　附属四校園が目指す「社会に開かれた教育課程」具現化計画

１　幼・小・中の連接による「附属校園で学んだ１５歳の姿」の育成 ---------- ２

２　特別支援教育の分野への附属特別支援学校の関わり ---------- ２

３　「社会に開かれた教育課程」の具現のために ---------- ２

４　具現するための方法 ---------- ３

５　具現化のイメージ図 ---------- ５

６　プロジェクトグループメンバー表 ---------- ６

Ⅲ　プロジェクトグループ活動報告書

１　教育目標・評価グループ ---------- ７

２　確かな学力グループ ---------- １９

３　豊かな心グループ ---------- ２１

４　学習・生活習慣グループ ---------- ３１

Ⅳ　まとめ ---------- ４０

Ⅰ　福島大学附属四校園ＫｅＣｏＦｕ推進協議会　方針

１　福島大学第３期中期目標との関連

２　附属校園の存在意義を示す必要性

３　附属校園の教育課題

４　KeCoFu推進協議会の今年度の方針

Ⅰ　福島大学附属四校公園ＫｅＣｏＦｕ推進協議会　方針

１　福島大学第３期中期目標との関連

福島大学附属四校園でＫｅＣｏＦｕ推進協議会を組織して事業を推進していることは，全国の附属校園の中でも画期的なことである。だからこそ，福島大学第３期中期目標における附属学校部門の目標・計画の中核となっている。附属四校園が連携して推進した上で，根拠を明らかにして評価し，着実に改善していく必要がある。

中期計画（附属校園関連項目　平成２８年度～３３年度）

第１期から第２期にかけて，大学と附属学校園、また附属学校園同士が協力し合い，幼稚園・小学校・中学校・特別支援学校の校種をこえて育てる人間像を共有し，連携課題を解決するという構想のもとに，ＫｅＣｏＦｕプロジェクトが実践された。平成２５年度に発足したＫｅＣｏＦｕ推進協議会は，その成果を引き継ぐものである。附属学校園は，それらの成果のもとに，次期学習指導要領の改訂に対応するために，各校種段階での能動的学習の導入やその指導法，コンピテンシーの評価法などの研究を行い，大学の教育研究の質を高め，附属学校園の教員の能力を向上させる。さらに，その成果を地域の学校教育に普及させるために、地域の教員を対象とした学校公開，研究会などを開催する。

２　附属校園の存在意義を示す必要性

近年，附属校園の役割や在り方に多くの方々から様々な指摘があり，２０１６年９月に文部科学省に「国立教員養成大学・学部，大学院，附属学校の改革に関する有識者会議」が設置され、審議が進められている。その中では、附属校園の存廃を含めて審議されており，附属校園の在り方や役割の一層の明確化が強く求められており，附属四校園協議会においても議論を重ねているところである。福島大学は教員養成学部ではないので，その附属校園の存在意義等を問われたときに，根拠を明らかにしながら明確に説明できるようにしておかなければならない。福島大学の附属校園は，決して安泰ではない。

３　附属校園の教育課題

こうした状況を踏まえ担当副学長は，本学附属校園の教育課題を「地域における指導的あるいはモデル的な学校として発信する取組」としてまとめ，次の３つの方向性に整理した。

(1) 恒常的な附属校園の教育・研究活動のさらなる充実
(2) 国の施策に応じた新学習指導要領への取組
(3) 地域特有の課題に即した取組

４　ＫｅＣｏＦｕ推進協議会の今年度の方針

このような附属校園を取り巻く状況を理解した上で，福島大学附属校園としての特色を明確に打ち出すとともに存在意義を主張していくために，次の方針でＫｅＣｏＦｕ推進協議会を進めていきたいと考えた。

(1) 児童生徒の健やかな成長を改革の中心に据えて，具体的な活動が形となって見えるようにする。それを評価・改善していくことを基本とする。
(2) 新学習指導要領の趣旨の中核である「社会に開かれた学校」を具現するための教育課程を各校園で改善・充実するとともに，幼稚園→小学校→中学校と「連接」を図ることにより，めざす児童生徒の姿を全教職員で共有し、具現のための事業を連携して推進することができるようにする。特別支援学校は，特別支援教育の分野から積極的に関わっていくようにする。
(3) 現行のテーマやキーコンピテンシーと各校園の研究テーマからすると，ダブルスタンダードになっているのではないかとの指摘がある。本年度は，各校園で進めている研究の方向性と一体と考え，特に豊かな学びを支える環境を創っていく事業を具体的に進めて行きたい。
(4) 本改革案を推進するに当たり，附属校園の教員の負担を増やすことはできるだけ避け，学習の約束や生活習慣などの児童生徒の学びを支える環境を学校ぐるみで整えていくことにより，教員の負担を軽減できるようにしていきたいと考えている。

Ⅱ　附属四校園が目指す
「社会に開かれた教育課程」具現化計画

１　幼・小・中の連携による
「附属校園で学んだ１５歳の姿」の育成

２　特別支援教育の分野への
附属特別支援学校の関わり

３　「社会に開かれた教育課程」の
具現のために

４　具現するための方法

５　具現化のイメージ図

６　プロジェクトグループメンバー一覧

Ⅱ　附属四校園が目指す「社会に開かれた教育課程」具現化計画

1　幼・小・中の連接による「附属校園で学んだ１５歳の姿」の育成

(1)「附属校園で学んだ１５歳の姿」の設定

①　ＫｅＣｏＦｕの人間像及び育みたい資質・能力に，次期学習指導要領の趣旨（答申第３章「生きる力」の理念の具体化）を加味して設定する。

②　各校園の教育目標に基づく目指す児童生徒の姿との整合・発展を図るとともに，研究の趣旨にも反映させることにより，附属幼・小・中の一貫性をもたせる。（ダブルスタンダードにならないように留意する）

(2) 幼→小→中の連接を図る分野

①　確かな学力の育成

ア　「主体的・対話的で深い学び」を視点にした授業研究を実施する。その際は，事前研究会の段階から四校園の関係教員が参加することにより，次期学習指導要領の趣旨を反映した授業の在り方を共有する。

イ　附属特別支援学校教員は，ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりという視点も持って参加する。

ウ　外国語教育の趣旨を踏まえ，小学校の各段階での活動や授業の在り方とともに，中学校の英語科への連接の内容・方法についても，具体的に検討し実行する。

②　豊かな心の育成

ア　附属小・中の教員は，特別の教科である道徳の授業を見合ったり実践例を共有したりしながら，授業の質的向上を図る。また，評価についても情報交換を行い，よりよい評価の在り方を模索する。

イ　道徳性に関する児童生徒の実態や意識を調査することにより，重点価値を設定して意図的・計画的に指導したり，指導計画別葉を作成して道徳教育の場を広く意識したりすることができるようにする。

③　学習・生活習慣の定着

ア　附属幼・小（低学年）の教員が「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有し，附属幼稚園教員の事例提供を受けながら「附属小スタートカリキュラム」を作成し実行することにより，児童が安心して学校生活に適応することができるようにする。

イ　基本的な学習の約束や家庭学習習慣について，附属小・中の現行の内容・方法を持ち寄ってすり合わせ，各校の全教員が共通理解の上で実行することにより，児童生徒にとって望ましい習慣を身に付けることができるようにする。

ウ　心身の健康を育てる生活習慣（体力向上，食育，性教育，情報教育等）について実態を把握し，四校園で連携・継続して取り組む。

2　特別支援教育の分野への附属特別支援学校の関わり

(1) 交流及び共同学習（児童生徒同士の交流→共同学習）

(2) インクルーシブ教育システム（合理的配慮、基礎的環境整備等への助言）

(3) 障害者理解（小・中学校の授業への教員派遣，児童生徒の授業体験　など）

(4) ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業（発達障害等のある児童生徒に合った授業づくり）

(5) ケース会議への支援（けやき相談員の在籍校訪問）

(6)「キャリア教育を基軸に，小中高等部の連接を図った教育課程への改善」の成果の発信

3「社会に開かれた教育課程」の具現のために

(1)「社会に開かれた教育課程」の趣旨

子供たちが身近な地域を含めた社会とのつながりの中で学び，自らの人生や社会をよりよく変えていくことができるという実感を持つことは，困難を乗り越え，未来に向けて進む希望と力を与えることにつながる。これからの教育課程には，社会の変化に目を向け，教育が普遍的に目指す根幹を堅持しつつ，社会の変化を柔軟に受け止めていく役割が期待されている。（答申第４章「社会に開かれた教育課程」の実現）

(2) 工夫・改善点

以下の点から各校園で工夫・改善していくとともに，校園間で関連性・発展性を持たせることにより，附属校園としての特色を出せるようにする。

①　教育目標を社会と共有する。

○　教育目標や学校経営ビジョンを社会に発信し，よりよい社会を創るという目標を共

有する。

② 教育課程を社会に発信する。

○ 目指す資質・能力及びそれを具現するための学習内容・方法・評価方法等を明確化し，積極的に社会に発信する。（Ｗｅｂサイトの充実）

③ 地域の人的・物的資源等を積極的に活用する。

○ 教育内容と関連する地域のひと・もの・こと・フィールドを活用したり，地域の活動に参加したりして，地域住民の理解と協力を得ることができるようにする。

④ カリキュラム・マネジメントを実現する。

○ カリキュラム・マネジメントのシステムを構築し，教育活動の改善・充実を図る。

○ 教育課程の編成→実施→評価→改善のＰＤＣＡサイクルを確立する。

○ 全教職員が参画することによって，学校の特色を創り上げていく。

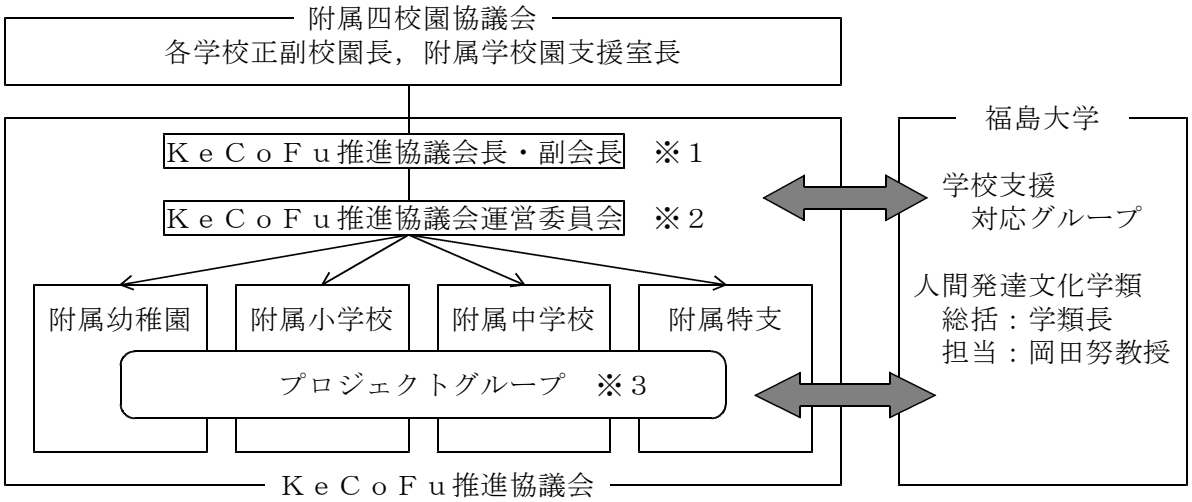
⑤ 学校評価を意図的に実施し，カリキュラム・マネジメントに生かす。

○ 学校評価の内容・方法を工夫し，教育活動改善にフィードバックする。

○ 各校での現行の方法にルーブリックの手法を生かし，成果や改善点が具体的に見えるようにすることにより，教員間で課題意識を共有して改善に取り組むことができるようにする。そのためにも，各校園の評価指標の作成に全教員が参加する。

４ 具現するための方法

(1) 推進するための組織



※１ 当番校は三校輪番制とし，校長が会長，副校長が副会長を務める。
（Ｒ１附属中→Ｒ２附属特支→Ｒ３附属小→Ｒ４附属中）
会長・副会長は，推進協議会の進捗状況について附属四校園協議会に報告するとともに，重要案件について協議する。

※２ 運営委員会は，計画に基づいてプロジェクト及び夏季研修会の企画・運営・推進を行う。運営委員会の起案に対する決済は，会長・副会長に一任する。

※３ プロジェクトグループは四校園教員が全員参加する。プロジェクトの内容やグループ編成は，本計画の重点や進捗状況等に応じて柔軟に設定する。

※４ 四校園の副校園長は，各プロジェクトグループの相談役を務める。
教育目標・評価Ｇ：山本 秀和（小） 確かな学力Ｇ ：菅野 浩智（中学校）
豊かな心Ｇ ：柳沼 哲（特支） 学習生活習慣Ｇ：星 俊子（幼稚園）

(2) 運営委員会及びプロジェクトグループの内容・構成

運営委員会	プロジェクトグループ （内容）	（メンバー）
委員長（当番校から1） ・運営、連絡調整 ・会長への報告 ・年間計画等作成	＜教育目標・評価グループ＞ １(1)①「附属校園で学んだ１５歳の姿」の設定 ② 各校園の目指す児童生徒の姿との整合・発展を図る。 ３(2)① 教育目標を社会と共有する。 ② 教育課程を社会に発信する。 ③ 地域の人的・物的資源等を活用する。 ④ ｶﾘｷｭﾗﾑ･ﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄを実現する。 ⑤ ルーブリックの手法を生かした学校評	各校の主幹教諭・教務主任

企画・運営担当(各校1) ・各学校への連絡調整 ・夏季研修会及びまとめの企画・運営 ・Ｗｅｂサイトによる発信 プロジェクトリーダー (ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄｸﾞﾙｰﾌﾟとの兼任) ・各プロジェクトの企画・運営 ・プロジェクト会議開催 学校支援対応グループ (窓口を大学教員より1名) ・大学との連絡・調整 ・内容・方法への助言	価を実施し、学校経営に生かす。	
	＜確かな学力グループ＞　※１ １(2)①　確かな学力の育成 ア　「主体的・対話的で深い学び」を視点にした授業研究を実施する。 ウ　小学校での外国語教育の授業の在り方とともに，中学校の英語科への連接の在り方について検討し実行する。 １(2)①イ、２(4)　ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりについても検討する。	各校園の研究担当中心
	＜豊かな心グループ＞ １(2)②　豊かな心の育成 ア　附属小・中の教員は，道徳の授業を見合ったり実践例を共有したりしながら，授業の質的向上を図る。また，評価についても情報交換を行い,よりよい評価の在り方を模索する。 イ　道徳性に関する児童生徒の実態を調査することにより，重点価値を設定したり指導計画別葉を作成したりして教員の意識を高める。 ２(1)　附属特支児童生徒との交流及び共同学習 (3)　障害者理解のための授業	各校園の道徳教育担当中心
	＜学習・生活習慣グループ＞　※２ １(2)③　学習・生活習慣の定着 ア　附属幼・小(低学年)の教員が連携して「スタートカリキュラム」を作成し，実行する。 イ　学習の約束や家庭学習習慣について，附属小・中の内容・方法をすり合わせ，全教員が共通理解の上で実行できるようにする。 ウ　心身の健康を育てる生活習慣について実態を把握し、連携・継続して取り組む。 ２(2)　ｲﾝｸﾙｰｼﾌﾞ教育ｼｽﾃﾑにおける合理的配慮や基礎的環境整備について検討する。 ２(5)　ケース会議への支援（けやき相談員の在籍校訪問）	各校園の生徒指導・健康教育担当中心

※１　グループを５チーム（教育研究，国語・算数数学，社会・理科，外国語，音楽・図工美術・家庭・体育）に分けて活動する。

※２　グループを３チーム（スタートカリキュラム，学習・生活習慣，心身の健康）に分けて活動する。

(3) 大学教員との連携

①　学校支援対応グループが大学側の窓口となり，各グループの活動を推進する上で必要となる専門的な知識や方法等に造詣が深い教員を紹介していただき，協同して推進できるようにする。

②　各グループ(チーム)から大学教員に協力いただきたい内容を明確にすることにより，附属学校園と大学との連携をより一層深める。

③　特にルーブリックの手法を生かした学校評価については，教育目標・評価チームと協同して計画的に進めることができるようにする。

(4) 年間計画

①　本計画は，第２期中期目標と連動させて５年次計画(２９～３３年度)で推進する。

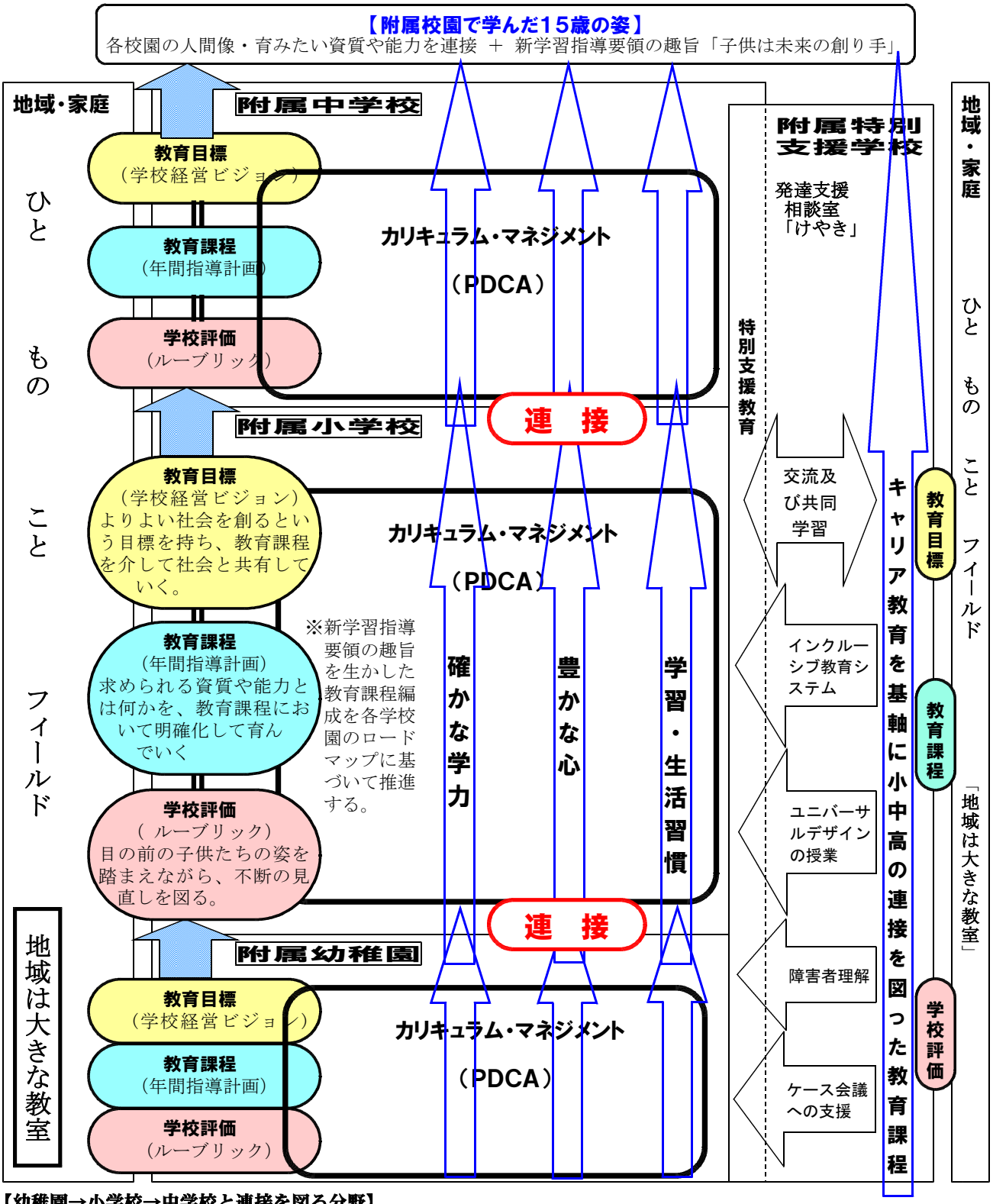
②　プロジェクトの内容やグループ編成等は，本計画の重点や進捗状況等に応じて柔軟に設定する。

③　今年度は，Ｈ３０年度に立案された見通しの中で，各プロジェクトグループ(チーム)ごとに計画を見直し，推進する。

④　年度末に各プロジェクトグループの活動を実施報告書にまとめ，各方面に発信する。

5　具現化のイメージ図

福島大学附属四校園が目指す「社会に開かれた教育課程」



【幼稚園→小学校→中学校と連接を図る分野】
確かな学力の育成「アクティブラーニング、外国語教育、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業」
豊かな心の育成「道徳の授業事例集作成・活用、道徳性の調査・教育課程への反映、指導計画別葉の作成・活用」
学習・生活習慣の定着「スタートカリキュラム、基本的な学習の約束、家庭学習の習慣、心身の健康を育てる生活習慣」

【特別支援学校のかかわり】
交流及び共同学習（児童生徒同士の交流から共同学習へ）
インクルーシブ教育システム（基礎的環境整備、合理的配慮等への助言）
障害者理解（小・中学校への授業への教員派遣、児童生徒の授業体験等）
ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業（発達障害等のある児童生徒に合った授業づくり）
ケース会議への支援（発達支援相談室「けやき」相談員の附属幼・小・中学校訪問）

【地域は大きな教室】
地域と学校が子供の教育に関する認識を共有し、変化する社会の動きを取り込み、地域と結びついた教育活動を展開することができるようにしていく。

6　プロジェクトグループメンバー一覧

運営委員会	会　　長		佐久間康之（中学校長）
	副 会 長		菅野　浩智（中学校副校長）
	運営委員	大学	岡田　　努
		幼	白石　昌子　　星　　俊子　　佐藤久美子　　大和田祥加　　遊佐　早苗 佐藤　友佳
		小	千葉　養伍　　山本　秀和　　中村　崇史　　野口　卓也　　加藤　　怜 小柳　　竣　　鶴宮裕一郎
		中	佐久間康之　　菅野　浩智　　嶋森　裕二　　車田　和樹　　甚野　隆洋 古関由以子　　芳賀　　団
		特別支援	新井　　浩　　柳沼　　哲　　鈴木　直樹　　本間　久登　　齊藤　香澄 篠木佐知子　　八巻　愛理　　渡辺　貴子

プロジェクトG		幼稚園	小学校	中学校	特別支援学校
教育目標・評価G		佐藤久美子	中村　崇史 岡村　　武	◎嶋森　裕二 善方　昭博	鈴木　直樹 渡部　貴子
確かな学力G	研究	大和田祥加	野口　卓也 高玉宏太郎	車田　和樹 菅野　江美	本間　久登 池田　幸浩 鈴木　拓巳
	国語・算数数学		今野　智功 品田あかね 矢野　　浩 三星　祐輔	◎甚野　隆洋 鈴木　悠介 上野　友寛	佐藤明希子 高玉　聡史 今野紗緒里
	社会・理科		加藤　　怜 植木　忠佑 板倉　正哉 沢　　貴史	小松　拓也 関本　慶太 原　　理沙	齊藤　香澄 佐藤　由佳 中村　　誠
	外国語		力丸　　愛 梅宮和喜子 大和田智子	仲江川友美 小林　一人 柏倉　侑奈	篠田　好美 佐久間紗和子
	音・図・家・体		福本　拓人 三瓶　　孝 鳥居　　綾 髙橋今日子 佐藤　文江 益田　憲幸	坂内　俊介 廣川　　豪 遠藤　真希 千葉はづき 赤沼　健一	大和田聡子 川名　瑞穂 増子　弘晃 梅原真智子 尾形　徳洋
豊かな心G		遊佐　早苗	小柳　　竣 荒　　篤徳 片寄　孝胤	◎古関由以子 川村　国央	篠木佐知子 三浦　志帆 佐藤　智明
学習生活習慣G	スタート カリキュラム		栗原さゆり 矢内　丈博		山内　　淳 神村　　崇
	学習・生活習慣		◎鶴宮裕一郎 斉藤　直人 星　　克	芳賀　　団 阿部　　哲	八巻　愛理 渡邊　裕子 阿部　真広
	心身の健康	佐藤　友佳	穂積梨映子 蓮沼　　茜	相模　由紀	堀部　聖華 廣居美貴子

Ⅲ　プロジェクトグループ活動報告書

1　教育目標・評価グループ

2　確かな学力グループ

3　豊かな心グループ

4　学習・生活習慣グループ

令和元年度　教育目標・評価グループ

【メンバー構成】

	幼稚園	小学校	中学校	特別支援学校
教育目標・ 評価Ｇ	佐藤　久美子	中村　崇史 岡村　　武	◎嶋森　裕二 善方　昭博	鈴木　直樹 渡部　貴子

１　具現化計画における本グループの取組内容

（１）「附属校園で学んだ１５歳の姿」を設定する。

（２）「附属校園で学んだ１５歳の姿」を育成するためのカリキュラム・マネジメントを実現する。

（３）ルーブリックの手法を生かした学校評価を実現し，学校経営に生かす。

２　グループの目標・方針等

（１）中学校の教育目標をベースに，各校園で「附属校園で学んだ１５歳の姿」，それを育成する評価を作成する。

（２）各校園の教育目標に基づく目指す児童生徒の姿との整合・発展を図るとともに，研究の趣旨にも反映させることにより，幼・小・中・特別支援の一貫性をもたせる。

（３）それぞれ新学習指導要領に基づき，育成すべき資質・能力を加味したものを設定する。

３　具体的な取組内容・方法等

（１）「教育目標」「カリキュラム・マネジメント，評価」の二つの視点から，グループの目標・方針に迫ることができるようにする。

（２）教育目標，「附属校園で学んだ１５歳の姿」を保護者・地域と共有する。

（３）「附属校園で学んだ１５歳の姿」を目指した教育課程を社会に発信する。

（４）地域の人的・物的資源当等を活用し，カリキュラム・マネジメントを実現する。

（５）ルーブリックの手法を生かした学校評価を実施し，学校経営に生かす。

（６）今後，５年間を見通して取り組む。

（７）年度ごとに計画を作成し，それに基づき，各校が連携して実践を進める。

（８）新学習指導要領の視点を取り入れ，社会に発信できるような実践に取り組む。

４　年次計画

	２９年度	３０年度	令和元年度
	構想期	実践期	実践期・評価期
姿	「附属校園で学んだ１５歳の姿」たたき台の作成。	「附属校園で学んだ１５歳の姿」完成。 職員への周知 保護者・地域と共有	各校園における求める姿との整合化。 地域運営協議会での評価 ホームページ周知 「附属校園で学んだ１５歳の姿」の見直し。
カリ・評	ルーブリック たたき台の作成	ルーブリック 試案の作成 カリキュラム・マネジメントの工夫・改善	ルーブリック評価実践 評価を基にしたカリキュラム･マネジメントの工夫・改善・見直し

５　今年度の計画

月	時期	グループでの取組内容・方法・プロセス等
9	構想期	「附属校園で学んだ１５歳の姿」の見直し，各校園ルーブリック修正
１０		各校園ルーブリック修正（各校園における求める姿との整合性）
１１	実践期	ルーブリックによる自己評価の実施（各校園で実施→附属中へ報告）
１２		各校園のデータを集約し，データを共有
1	評価期	データを基に今年度のまとめ
2		取組を振り返り，次年度に向けての準備

６　今年度の取組について

（１）取組の実際

「附属四校園で学んだ１５歳の姿」や「マトリクス」をまとめることができ，４校園で目指す姿を共有することができた。また，「各校園のルーブリック」を作成し，児童生徒の成長を共通の捉えで観ることができるようになった。

（２）成果と課題

○「附属四校園で学んだ１５歳の姿」を設定することにより，各校園の教育目標等で求める姿のみならず，時代の様相や社会のニーズ等に応じた，目指す姿にまだ視野を広げた教育・支援が実践できるようになった。

●「ルーブリック」が各校園間でずれが生じ，小学校６年生と中学校１年生の整合性がとれていないので，各校園で連絡・連携で「ルーブリック」の作成にあたらなければならないと感じた。

７　これまでの振り返り

四校園で協議・検討を重ね「附属四校園で学んだ１５歳の姿」を設定し，附属四校園の職員全体で共有することができた。四校園の連携を深める意味では有意義な活動になったと思う。四校園で目指す姿を明確にし，その目標に向かって全員で取り組むことができる協議会を目指していきたいと思う。

８　アンケート結果

各校園で作成したルーブリックを用いてアンケートを行った。結果は以下の通りである。

○附属幼稚園

福島大学附属四校園で目指す子どもの姿のためのルーブリック【附属幼稚園】

附属校園で 目指す15歳の姿	附属幼稚園で 目指す姿	ステップ4	ステップ3	ステップ2	ステップ1
問い続ける力	**自己目標の設定**				
高い志をもち，主体的に人生を切り拓く姿	自分でやりたいことの課題をもつ	自分のやりたいことに向かって,心と体を十分に働かせ,見通しをもって遊びを進めていく。	自分のやりたいことが意識化され,継続して取り組む。	自分のやりたい遊びを見つけ,心と体を動かしながら遊ぶ。	気に入ったものや興味のあるものなどに関わりながら,自分のやりたい遊びをしていく。
	解決に向けての努力				
	自分で考えたり試したり工夫したりする	自分のやりたいことを実現するために,考えたり,試したり工夫したりしながら,あきらめずにやり遂げる。	教師の援助を受けながら,少し難しいことに挑戦したり,工夫したり試したりする。	面白いと思ったことを繰り返す中で,自分なりにやってみようと思ったことをやってみたり,試したりする。	気に入ったものや興味のあるものなどに関わりながら,自分のやりたい遊びをしていく。
人間関係をつくる力	**互いのよさの認め合い**				
他者とかかわり合い，自分や友だちのよさを認め，協働する姿	それぞれの持ち味を発揮し,友達のよさに気づく	援助する教師の姿勢や言葉かけなどを通して,互いの好きなことや得意なことを遊びや活動の中で生かしたり,互いの良さに気づいたりする。	友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わい,みんなの中で自己発揮していく。	友達と関わる中で,嬉しい,悔しい,悲しい,楽しいなどの感情体験を味わう。	同年齢の集団の中で,安定して生活する。
	よりよい人間関係の構築				
	自分の気持ちを調整し，友達と折り合いをつけながら遊ぶ	遊びの中で起きるいざこざなどの場面において,自分の気持ちを調整したり,より楽しく遊べるように提案したりする。	思いやイメージが折り合わずに起きるいざこざに対して,教師の援助を得ながら部分的に相手の思いやイメージを受け入れる。	相手が自分の思い通りに動いてくれないこともあると知り,保育者の援助を得ながら友達と関わり方を感じていく。	気に入った相手には関わり,そうでもない相手のことは気にとめない。
自己を見つめる力	**自分の成長の自覚**				
ありのままの自己を見つめ，新たな価値を創造していく姿	先生や友達に認められ,大きくなった喜びや自覚をもつ	様々な活動を楽しむ中で,達成感を味わい,自信をもって行動したり,自分が人の役に立つ喜びを感じたりする。	家族や身近な人々と関わり,相手の気持ちに気づく。	教師の援助を受けて,自分でできること自分の力で行おうとする。	気に入ったものや興味のあるものなどに関わりながら,自分のやりたい遊びをしていく。
	なりたい自分の想像				
	先生や友達に認められ,大きくなった喜びや自覚をもつ	様々な活動を楽しむ中で,達成感を味わい,自信をもって行動したり,自分が人の役に立つ喜びを感じたりする。	家族や身近な人々と関わり,相手の気持ちに気づく。	教師の援助を受けて,自分でできること自分の力で行おうとする。	気に入ったものや興味のあるものなどに関わりながら,自分のやりたい遊びをしていく。

附属幼稚園職員が年少児・年中児・年長児に分け，それぞれの児童がどのステップに属しているか評価をした。下記の表はその人数を表している。

附属幼稚園　　（人）

15歳の姿	目指す姿	学部	ステップ4	ステップ3	ステップ2	ステップ1
問い続ける力	自己目標の設定	年少児	0	2	13	6
	自分でやりたいことの課題をもつ	年中児	0	21	0	2
		年長児	7	8	1	0
	解決に向けての努力	年少児	0	0	11	10
	自分で考えたり試したり工夫したりする	年中児	0	18	5	0
		年長児	9	5	2	0
人間関係をつくる力	互いのよさの認め合い	年少児	0	0	14	7
	それぞれの持ち味を発揮し，友達のよさに気づく	年中児	1	19	2	1
		年長児	12	4	0	0
	よりよい人間関係の構築	年少児	0	0	17	4
	自分の気持ちを調整し，友達と折り合いをつけながら遊ぶ	年中児	3	12	6	2
		年長児	7	9	1	0
自己を見つめる力	自分の成長の自覚	年少児	0	0	13	8
	先生や友達に認められ，大きくなった喜びや自覚をもつ	年中児	2	17	4	0
		年長児	9	6	1	0

○附属小学校

福島大学附属四校園で目指す子どもの姿のためのルーブリック【附属小学校】

附属校園で目指す15歳の姿	附属小学校で目指す姿	ステップ4	ステップ3	ステップ2	ステップ1
問い続ける力	**自己目標の設定**				
高い志をもち，主体的に人生を切り拓く姿	自ら問いをもち，学びに向かおうとする 設問１	周りの意見も取り入れながら，自らの問いを焦点化し，具体的な方法を考えながら学びに向かおうとする。	自らの問いをもち，解決に向けて具体的な方法を考えながら，学びに向かおうとする。	自らの問いを意識し，積極的に学びに向かおうとする。	自らの興味・関心を意識し，「やってみようかな」と問いをもって学びに向かおうとする。
	解決に向けての努力				
	試したり見通しをもったりしながら，よりよ 設問２	様々な視点を取り入れながら見通しをもち，よりよい解決方法を考えて活動することができる。	自分なりに見通しを見いだし，よりよい解決方法を考えて活動することができる。	何度も試したり，工夫したりしながら，自分なりの解決方法を考え，活動することができる。	何度も試したり，工夫したりしながら，あきらめずに活動することができる。
人間関係をつくる力	**互いのよさの認め合い**				
他者とかかわり合い，自分や友だちのよさを認め，協働する姿	互いの思いや考えを主張したり，受け止め 設問３	自分の思いや考えを的確に分かりやすく相手に伝えたり，相手の主張を尊重しながら聞いたりすることができる。	自分の思いや考えを的確に表現することで主張したり，相手の主張点を理解しながら聞いたりすることができる。	自分の思いや考えに，こだわりをもって表現したり，相手の表現にも耳を傾けて聞くことができる。	自分の思いや考えを素直に表現したり，相手の表現に興味をもって聞いたりすることができる。
	よりよい人間関係の構築				
	友達と主体的にかかわりを深める 設問４	課題解決に向けて多様な解決方法を探ろうと，様々な友達と協力することができる。	友達と共に課題解決に向けて協力することができる。	自分から積極的に声をかけ，複数の友達と楽しく活動することができる。	仲のよい友達に声をかけたり，友達からの誘いに合わせたりしながら，楽しく活動することができる。
自己を見つめる力	**自分の成長の自覚**				
ありのままの自己を見つめ，新たな価値を創造していく姿	ありのままの自分を自覚し，自分自身の 設問５	自分自身のよさや課題をありのまま受け止め，自分の成長に自信をもつことができる。	客観的によいことも悪いことも振り返り，自分自身のよさや課題に気付き，ありのままの自分を受け入れることができる。	単元・期末ごとなど一定程度の期間を見て，できたことやがんばったこと，もう少しだったところなど，自分で自分のことを振り返ることができる。	活動ごとなど短い期間で振り返り，できたことやがんばったことを中心に，自分に自信をもつことができる。
	なりたい自分の想像				
	自分自身を肯定的に捉え，次の活動に 思い描く 設問６	自分の役割を意識し，なりたい自分に向かって，努力することができる。	自分の役割を意識し，なりたい自分像を思い描くことができる。	自分のできることやがんばれることを生かし，意欲的に活動したり，仕事を手伝ったりすることができる。	何事にも挑戦し，意欲的に活動したり，仕事を手伝ったりすることができる。
2年間で目指す大まかな推移		６年生	４・５年生	２・３年生	１年生
		高学年	中学年	低学年	

小学校１年生はステップ１，２年生はステップ２に注目し，下記の４段階で担任による評価を行った。
表は学年の４段階評価の平均を表している。

	設問1	設問2	設問3	設問4	設問5	設問6
附属小1年	3.1	3.2	3.1	3.3	3.1	3.2
附属小2年	2.8	3.1	2.9	2.9	2.8	3.1

４　よくできている　　３　できている　　２　あまりできていない　　１　できていない

３年生はステップ２，４年生はステップ３においてアンケートを自己評価で実施。

	設問1	設問2	設問3	設問4	設問5	設問6
附属小3年	2.7	2.6	3.3	3.1	3.2	2.9
附属小4年	2.8	2.9	2.9	3.3	3.0	3.1

４　よくできている　　３　できている　　２　あまりできていない　　１　できていない

５年生はステップ３，６年生はステップ４においてアンケートを自己評価で実施。

	設問1	設問2	設問3	設問4	設問5	設問6
附属小5年	2.6	2.7	2.7	2.6	2.7	3.0
附属小6年	2.6	2.7	2.6	2.9	2.6	2.8

４　よくできている　　３　できている　　２　あまりできていない　　１　できていない

○附属中学校

福島大学附属四校園で目指す子どもの姿のためのルーブリック【附属中学校】

附属校園で目指す15歳の姿	附属中学校で目指す姿	ステップ4	ステップ3	ステップ2	ステップ1
問い続ける力 高い志をもち，主体的に人生を切り拓く姿	**自己目標の設定** 進路実現のために目標を定め，その達成 設問１	周りの意見も取り入れながら，自らの進路を焦点化し，具体的な目標を定め，その達成のために取り組むことができる。	自らの課題をもち，進路実現に向けて具体的な目標を考えながら，目標達成に向かうことができる。	進路目標を意識し，積極的に目標達成に向かうことができる。	自らの興味・関心・適性について理解し，進路目標を設定する。
	解決に向けての努力 何事にも意欲的に取り組み，充実した活 設問２	様々な視点を取り入れながら何事にも意欲的に取り組み，充実した活動することができる。	何事にも意欲的に取り組み，充実した活動をすることができる。	何度も試したり，工夫したりしながら，あきらめずに活動することができる。	何度も試したり，工夫したりしながら，活動することができる。
人間関係をつくる力 他者とかかわり合い，自分や友だちのよさを認め，協働する姿	**互いのよさの認め合い** 互いに意見を磨き合い，向上心をもって 設問３	自分の思いや考えを的確に分かりやすく相手に伝えたり，相手の主張を尊重しながら互いの意見を磨き合い，向上心をもって活動する。	自分の思いや考えを的確に表現することで主張したり，相手の主張点を理解しながら聞いたりすることができる。	自分の思いや考えを分かりやすく表現したり，相手の表現にも耳を傾けて理解して聞くことができる。	自分の思いや考えを素直に表現したり，相手の表現を聞いたりすることができる。
	よりよい人間関係の構築 時，場所，状況に応じて的確な行動をす 設問４	課題解決に向けて他と協力して課題解決するために，時，場所，状況に応じて的確な行動をすることができる。	課題解決に向けて他と協力して課題解決するために，時，場所，状況に応じて行動することができる。	課題解決に向けて，他と協力して課題解決するために状況に応じて行動することができる。	課題解決に向けて，他と協力して行動することができる。
自己を見つめる力 ありのままの自己を見つめ，新たな価値を創造していく姿	**自分の成長の自覚** 見通しをもって行動し，有意義な生活を送 設問５	自分自身の課題を解決するため，見通しをもって行動し，有意義な生活を送ることができる。	自分自身の課題を解決するために見通しをもって行動し，生活を向上させることができる。	自分自身の課題を解決するために見通しをもって行動し，生活することができる。	自分自身の課題を解決するために行動し，振り返ることで生活を向上させようとすることができる。
	なりたい自分の想像 自分にあった学習，生活の方法を身に付 力する 設問６	進路実現のためにも自分にあった学習，生活の方法を身に付け，目標に向かって努力することができる。	自分の進路目標を設定し，自分にあった学習，生活の方法を身に付け生活することができる。	自分の目標を設定し，自分にあった学習，生活の方法を理解し生活することができる。	自分の目標を設定し，自分にあった学習，生活の方法を振り返ることができる。
3年間で目指す大まかな推移		３年生	２年生	１年生	１学年
					２学年
		３学年			

中学校１年生はステップ２，２年生はステップ３，３年生はステップ４に注目し，それぞれのステップで４段階で自己評価を行った。

表は学年の４段階評価の平均を表している。回答１～４までの数字は人数を表している。

附属中1年	回答1	回答2	回答3	回答4	平均
設問1	6	28	60	36	3.0
設問2	2	16	60	52	3.2
設問3	3	9	59	59	3.3
設問4	1	15	44	70	3.4
設問5	3	21	70	36	3.1
設問6	4	25	59	42	3.1

回答1	あてはまらない
回答2	どちらかといえば当てはまらない
回答3	どちらかといえば当てはまる
回答4	当てはまる

附属中2年	回答1	回答2	回答3	回答4	平均
設問1	3	18	64	42	3.1
設問2	5	15	63	44	3.1
設問3	2	10	53	62	3.4
設問4	3	13	45	66	3.4
設問5	2	15	66	44	3.2
設問6	3	26	53	45	3.1

回答1	あてはまらない
回答2	どちらかといえば当てはまらない
回答3	どちらかといえば当てはまる
回答4	当てはまる

附属中3年	回答1	回答2	回答3	回答4	平均
設問1	1	7	36	82	3.6
設問2	2	4	33	87	3.6
設問3	1	6	32	87	3.6
設問4	0	5	33	88	3.7
設問5	1	9	48	68	3.5
設問6	1	7	31	87	3.6

回答1	あてはまらない
回答2	どちらかといえば当てはまらない
回答3	どちらかといえば当てはまる
回答4	当てはまる

○附属特別支援

福島大学附属四校園で目指す子どもの姿のためのルーブリック【附属特別支援学校】

附属校園で目指す15歳の姿	附属中学校で目指す姿	ステップ4	ステップ3	ステップ2	ステップ1
問い続ける力	**自己目標の設定**				
高い志をもち，主体的に人生を切り拓く姿	自分で考え，自分で決める	自己の特性について肯定的に捉え、努力することの大切さが分かり、必要な時には、適切な支援を求めるなど、適切な判断力を養いつつ、課題に取り組んでいこうとすることができる。	自己の個性や興味・関心に基づいて、よりよい選択をしようとすることができる。	提示された3つ以上の選択肢の中から一つ選んで決めることができる。	提示された2つの選択肢の中から一つ選んで決めることができる。
	解決に向けての努力				
	自分の役割を進んで果たす	社会の中で自分が果たすべき役割があることを理解し、実行することができる。	学校生活や家庭生活において、自分が果たすべき役割があることを理解し、継続的に実行することができる。	友達を意識したり、簡単な役割を主体的に果たしたりすることができる。	学級などの基礎的な集団活動において、手伝いをすることができる。
人間関係をつくる力	**互いのよさの認め合い**				
他者とかかわり合い，自分や友だちのよさを認め，協働する姿	互いに助け合って生活する	互いに支え合い、分かり合える友人を得ることができる。	他者に配慮しながら、積極的に人間関係を築こうとすることができる。	友達と協力して、学習や活動に取り組むことができる。	友達の気持ちを考えることができる。
	よりよい人間関係の構築				
	思いやりをもって生活する	他者の価値観や個性を理解して、それを受け入れて活動することができる。	お互いの立場を理解し、チームを組んで互いに支え合いながら活動することができる。	思いやりの気持ちを持ち、相手の立場に立って考え行動しようとすることができる。	友達と仲良く遊び、助け合うことができる。
自己を見つめる力	**自分の成長の自覚**				
ありのままの自己を見つめ，新たな価値を創造していく姿	自分で考え、自信をもつ	自己の思いや意見を適切に伝え、他者の意思等を的確に理解することができる。	自己の個性や興味・関心に基づいて、よりよい選択をしようとすることができる。	自分のやりたいこと、よいと思うことなどを考え、進んで取り組むことができる。	自分のことは自分で行おうとすることができる。
	なりたい自分の想像				
	自分のよさを知り、自分に合った役割を果たす	学校や社会において自分の果たすべき役割を理解し、積極的に役割を果たすことができる。	自分の役割やその進め方、よりよい集団活動のための役割分担やその方法等を知ることができる。	係活動などで自分のやりたい係、やれそうな係を選ぶことができる。	係や当番の活動に取り組み、それらの大切さを知ることができる。

附属特別支援職員が小学部・中学部・高等部の生徒がどのステップに属しているか評価をした。下記の表はその人数を表している。

附属特別支援　　（人）

15歳の姿	目指す姿	学部	ステップ4	ステップ3	ステップ2	ステップ1	ステップ1の前
問い続ける力	自己目標の設定	小学部	0	9	6	1	0
	自分で考え、自分で決める	中学部	4	5	5	2	0
		高等部	2	4	9	6	0
	解決に向けての努力	小学部	0	9	3	4	0
	自分の役割を進んで果たす	中学部	1	5	8	2	0
		高等部	2	8	5	6	0
人間関係をつくる力	互いのよさの認め合い	小学部	0	0	5	3	8
	互いに助け合って生活する	中学部	0	7	7	2	0
		高等部	2	5	6	8	0
	よりよい人間関係の構築	小学部	0	0	5	8	3
	思いやりをもって生活する	中学部	1	5	6	4	0
		高等部	2	2	13	4	0
自己を見つめる力	自分の成長の自覚	小学部	0	9	4	3	0
	自分で考え、自信をもつ	中学部	0	3	6	7	0
		高等部	2	5	7	7	0
	なりたい自分の想像	小学部	0	0	13	0	3
	自分のよさを知り、自分に合った役割を果たす	中学部	2	7	4	3	0
		高等部	3	3	9	6	0

四校園で目指す人間像・15歳の姿と各校園の教育目標

自己デザインができる人間

問い続ける力・・・未知のものに出会いたいという思いをもち，自らの課題を主体的に解決する力
人間関係をつくる力・・・異なる意見や他者の考えを受け入れ，自分とのかかわりを見いだし，よりよい関係を創り上げる力

附属四校園で学んだ15歳の姿
- ○　高い志をもち，主体的に人生を切り拓く姿　（問い続ける）
- ○　他者とのかかわり合い，自分や友達のよさを認め，協働する姿　（人間関係をつくる）
- ○　ありのままの自己を見つめ，新たな価値を創造していく姿　（自己を見つめる）

高い志をもち，主体的に人生を切り拓くとは
- ○　自己の目標を設定し，その達成に向けて学んだことを活用する
- ○　問題の本質を見極め，多様な解決方法の中から，よりよいものを選択し，解決に向けて努力する

かかわり合うとは
- ○　多様な見方や考え方のよさを生かしながら，友だちと共に課題解決する
- ○　よりよい人間関係を築き，互いに高め合う

自分の友だちのよさを認め，見つめ，新たな価値を創造していくとは
- ○　なりたい自分を思い描き，新たな価値を創造する

中学校

**豊かな知性と誠実な社会性をもち，
実践力のある心身共に健康な生徒を育成する**

小学校

**未来の可能性に立ち向かって愛と英知をもち
たくましく前進する
創造性豊かな人間の育成をめざす**
- ○　進んで考える子ども
- ○　美しさを感じる子ども
- ○　からだをきたえる子ども

幼稚園

**健康で明るくたくましい子ども
よく見　よく考え　行動する子ども
心情豊かで　思いやりのある子ども
表現することを　楽しめる子ども
ひとりでも　友達とも　遊べる子ども**

特別支援

1　自分を高めようと努力する人
2　他人をだいじにしようと努力する人
3　社会につくそうと努力する人

各校園教育目標

附属四校園の現行の「目指す児童生徒の姿」

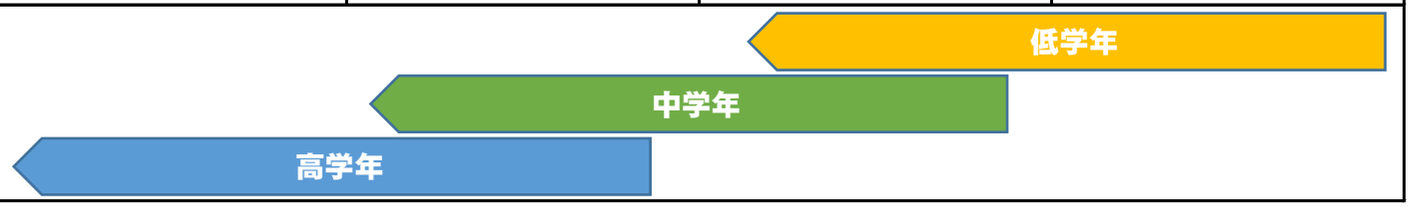
資料2

	身に付けさせたい項目	幼稚園	小学校	中学校	特別支援
問い続ける力	自己目標の設定	自分でやりたいことの課題をもつ	自ら問いをもち，学びに向かおうとする	実社会や実生活の中から問いを見いだし，自分で課題を設定する	自分で考え，自分で決める
	解決に向けての努力	自分で考えたり試したり工夫したりする	試したり見通しをもったりしながら，よりよいものを求める	見通しをもったり，計画を立てたりして，課題解決に向かう	自分の役割を進んで果たす
人間関係を作る力	互いのよさの認め合い	それぞれの持ち味を発揮し，友達のよさに気づく	互いの思いや考えを主張したり，受け止めたりする	互いの意見を尊重し，向上心をもって活動する	互いに助け合って生活する
	よりよい人間関係の構築	自分の気持ちを調整し，友達と折り合いをつけながら遊ぶ	友達と主体的にかかわりを深める	相手の立場になって考え，思いやりの気持ちをもって相手に接する	思いやりをもって生活する
自分を見つめる力	自分の成長の自覚	先生や友達に認められ，大きくなった喜びや自覚をもつ	ありのままの自分を自覚し，自分自身の変容を感じる	将来に対して見通しをもち，理想の自分に近づいているか振り返る	自分で考え，自信をもつ
	なりたい自分の想像	様々な体験を通して，イメージ豊かに表現する	自分自身を肯定的に捉え，次の活動に向かってなりたい姿を思い描く	自分にあった学習，生活の方法を身に付け目標に向かって努力する	自分のよさを知り，自分に合った役割を果たす

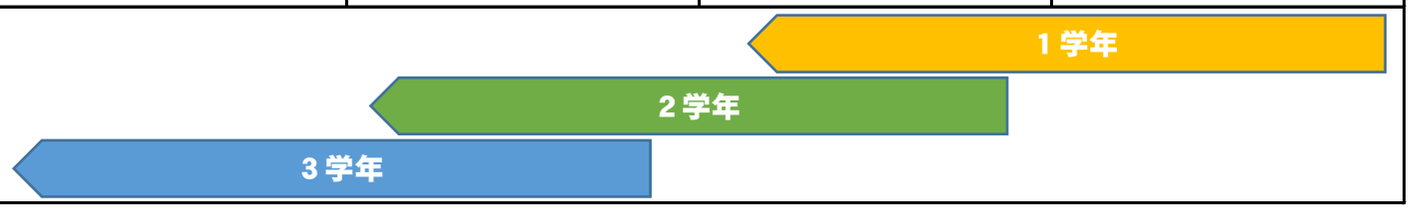
福島大学附属四校園で目指す子どもの姿のためのルーブリック【附属幼稚園】

附属校園で 目指す15歳の姿	附属幼稚園で 目指す姿	ステップ4	ステップ3	ステップ2	ステップ1
問い続ける力 高い志をもち，主体的に人生を切り拓く姿	**自己目標の設定** 自分でやりたいことの課題をもつ	自分のやりたいことに向かって,心と体を十分に働かせ,見通しをもって遊びを進めていく。	自分のやりたいことが意識化され,継続して取り組む。	自分のやりたい遊びを見つけ,心と体を動かしながら遊ぶ。	気に入ったものや興味のあるものなどに関わりながら,自分のやりたい遊びをしていく。
	解決に向けての努力 自分で考えたり試したり工夫したりする	自分のやりたいことを実現するために,考えたり,試したり工夫したりしながら,あきらめずにやり遂げる。	教師の援助を受けながら,少し難しいことに挑戦したり,工夫したり試したりする。	面白いと思ったことを繰り返す中で,自分なりにやってみようと思ったことをやってみたり,試したりする。	気に入ったものや興味のあるものなどに関わりながら,自分のやりたい遊びをしていく。
人間関係をつくる力 他者とかかわり合い，自分や友だちのよさを認め，協働する姿	**互いのよさの認め合い** それぞれの持ち味を発揮し,友達のよさに気づく	援助する教師の姿勢や言葉かけなどを通して,互いの好きなことや得意なことを遊びや活動の中で生かしたり,互いの良さに気づいたりする。	友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わい,みんなの中で自己発揮していく。	友達と関わる中で,嬉しい,悔しい,悲しい,楽しいなどの感情体験を味わう。	同年齢の集団の中で,安定して生活する。
	よりよい人間関係の構築 自分の気持ちを調整し，友達と折り合いをつけながら遊ぶ	遊びの中で起きるいざこざなどの場面において,自分の気持ちを調整したり,より楽しく遊べるように提案したりする。	思いやイメージが折り合わずに起きるいざこざに対して,教師の援助を得ながら部分的に相手の思いやイメージを受け入れる。	相手が自分の思い通りに動いてくれないこともあると知り,保育者の援助を得ながら友達と関わり方を感じていく。	気に入った相手には関わり,そうでもない相手のことは気にとめない。
自己を見つめる力 ありのままの自己を見つめ，新たな価値を創造していく姿	**自分の成長の自覚** 先生や友達に認められ,大きくなった喜びや自覚をもつ	様々な活動を楽しむ中で,達成感を味わい,自信をもって行動したり,自分が人の役に立つ喜びを感じたりする。	家族や身近な人々と関わり,相手の気持ちに気づく。	教師の援助を受けて,自分でできること自分の力で行おうとする。	気に入ったものや興味のあるものなどに関わりながら,自分のやりたい遊びをしていく。
	なりたい自分の想像 先生や友達に認められ,大きくなった喜びや自覚をもつ	様々な活動を楽しむ中で,達成感を味わい,自信をもって行動したり,自分が人の役に立つ喜びを感じたりする。	家族や身近な人々と関わり,相手の気持ちに気づく。	教師の援助を受けて,自分でできること自分の力で行おうとする。	気に入ったものや興味のあるものなどに関わりながら,自分のやりたい遊びをしていく。

福島大学附属四校園で目指す子どもの姿のためのルーブリック【附属小学校】

附属校園で 目指す15歳の姿	附属小学校で 目指す姿	ステップ4	ステップ3	ステップ2	ステップ1
問い続ける力 高い志をもち，主体的に人生を切り拓く姿	**自己目標の設定** 自ら問いをもち，学びに向かおうとする	周りの意見も取り入れながら，自らの問いを焦点化し，具体的な方法を考えながら学びに向かおうとする。	自らの問いをもち，解決に向けて具体的な方法を考えながら，学びに向かおうとする。	自らの問いを意識し，積極的に学びに向かおうとする。	自らの興味・関心を意識し，「やってみようかな」と問いをもって学びに向かおうとする。
	解決に向けての努力 試したり見通しをもったりしながら，よりよいものを求める	様々な視点を取り入れながら見通しをもち，よりよい解決方法を考えて活動することができる。	自分なりに見通しを見いだし，よりよい解決方法を考えて活動することができる。	何度も試したり，工夫したりしながら，自分なりの解決方法を考え，活動することができる。	何度も試したり，工夫したりしながら，あきらめずに活動することができる。
人間関係をつくる力 他者とかかわり合い，自分や友だちのよさを認め，協働する姿	**互いのよさの認め合い** 互いの思いや考えを主張したり，受け止めたりする	自分の思いや考えを的確に分かりやすく相手に伝えたり，相手の主張を尊重しながら聞いたりすることができる。	自分の思いや考えを的確に表現することで主張したり，相手の主張点を理解しながら聞いたりすることができる。	自分の思いや考えに，こだわりをもって表現したり，相手の表現にも耳を傾けて聞くことができる。	自分の思いや考えを素直に表現したり，相手の表現に興味をもって聞いたりすることができる。
	よりよい人間関係の構築 友達と主体的にかかわりを深める	課題解決に向けて多様な解決方法を探ろうと，様々な友達と協力することができる。	友達と共に課題解決に向けて協力することができる。	自分から積極的に声をかけ，複数の友達と楽しく活動することができる。	仲のよい友達に声をかけたり，友達からの誘いに合わせたりしながら，楽しく活動することができる。
自己を見つめる力 ありのままの自己を見つめ，新たな価値を創造していく姿	**自分の成長の自覚** ありのままの自分を自覚し，自分自身の変容を感じる	自分自身のよさや課題をありのまま受け止め，自分の成長に自信をもつことができる。	客観的によいことも悪いことも振り返り，自分自身のよさや課題に気付き，ありのままの自分を受け入れることができる。	単元・期末ごとなど一定程度の期間を見て，できたことやがんばったこと，もう少しだったところなど，自分で自分のことを振り返ることができる。	活動ごとなど短い期間で振り返り，できたことやがんばったことを中心に，自分に自信をもつことができる。
	なりたい自分の想像 自分自身を肯定的に捉え，次の活動に向かってなりたい姿を思い描く	自分の役割を意識し，なりたい自分に向かって，努力することができる。	自分の役割を意識し，なりたい自分像を思い描くことができる。	自分のできることやがんばれることを生かし，意欲的に活動したり，仕事を手伝ったりすることができる。	何事にも挑戦し，意欲的に活動したり，仕事を手伝ったりすることができる。
2年間で目指す大まかな推移					

福島大学附属四校園で目指す子どもの姿のためのルーブリック【附属中学校】

附属校園で 目指す15歳の姿	附属中学校で 目指す姿	ステップ4	ステップ3	ステップ2	ステップ1
問い続ける力 高い志をもち，主体的に人生を切り拓く姿	**自己目標の設定** 進路実現のために目標を定め，その達成のために取り組む	周りの意見も取り入れながら，自らの進路を焦点化し，具体的な目標を定め，その達成のために取り組むことができる。	自らの課題をもち，進路実現に向けて具体的な目標を考えながら，目標達成に向かうことができる。	進路目標を意識し，積極的に目標達成に向かうことができる。	自らの興味・関心・適性について理解し，進路目標を設定する。
	解決に向けての努力 何事にも意欲的に取り組み，充実した活動を行う	様々な視点を取り入れながら何事にも意欲的に取り組み，充実した活動することができる。	何事にも意欲的に取り組み，充実した活動をすることができる。	何度も試したり，工夫したりしながら，あきらめずに活動することができる。	何度も試したり，工夫したりしながら，活動することができる。
人間関係をつくる力 他者とかかわり合い，自分や友だちのよさを認め，協働する姿	**互いのよさの認め合い** 互いに意見を磨き合い，向上心をもって活動する	自分の思いや考えを的確に分かりやすく相手に伝えたり，相手の主張を尊重しながら互いの意見を磨き合い，向上心をもって活動する。	自分の思いや考えを的確に表現することで主張したり，相手の主張点を理解しながら聞いたりすることができる。	自分の思いや考えを分かりやすく表現したり，相手の表現にも耳を傾けて理解して聞くことができる。	自分の思いや考えを素直に表現したり，相手の表現を聞いたりすることができる。
	よりよい人間関係の構築 時，場所，状況に応じて的確な行動をする	課題解決に向けて他と協力して課題解決するために，時，場所，状況に応じて的確な行動をすることができる。	課題解決に向けて他と協力して課題解決するために，時，場所，状況に応じて行動することができる。	課題解決に向けて，他と協力して課題解決するために状況に応じて行動することができる。	課題解決に向けて，他と協力して行動することができる。
自己を見つめる力 ありのままの自己を見つめ，新たな価値を創造していく姿	**自分の成長の自覚** 見通しをもって行動し，有意義な生活を送る	自分自身の課題を解決するため，見通しをもって行動し，有意義な生活を送ることができる。	自分自身の課題を解決するために見通しをもって行動し，生活を向上させることができる。	自分自身の課題を解決するために見通しをもって行動し，生活することができる。	自分自身の課題を解決するために行動し，振り返ることで生活を向上させようとすることができる。
	なりたい自分の想像 自分にあった学習，生活の方法を身に付け目標に向かって努力する	進路実現のためにも自分にあった学習，生活の方法を身に付け，目標に向かって努力することができる。	自分の進路目標を設定し，自分にあった学習，生活の方法を身に付け生活することができる。	自分の目標を設定し，自分にあった学習，生活の方法を理解し生活することができる。	自分の目標を設定し，自分にあった学習，生活の方法を振り返ることができる。
3年間で目指す大まかな推移					

福島大学附属四校園で目指す子どもの姿のためのルーブリック【附属特別支援学校】

附属校園で 目指す15歳の姿	附属中学校で 目指す姿	ステップ4	ステップ3	ステップ2	ステップ1
問い続ける力 高い志をもち，主体的に人生を切り拓く姿	**自己目標の設定** 自分で考え，自分で決める	自己の特性について肯定的に捉え、努力することの大切さが分かり、必要な時には、適切な支援を求めるなど、適切な判断力を養いつつ、課題に取り組んでいこうとすることができる。	自己の個性や興味・関心に基づいて、よりよい選択をしようとすることができる。	提示された3つ以上の選択肢の中から一つ選んで決めることができる。	提示された2つの選択肢の中から一つ選んで決めることができる。
	解決に向けての努力 自分の役割を進んで果たす	社会の中で自分が果たすべき役割があることを理解し、実行することができる。	学校生活や家庭生活において、自分が果たすべき役割があることを理解し、継続的に実行することができる。	友達を意識したり、簡単な役割を主体的に果たしたりすることができる。	学級などの基礎的な集団活動において、手伝いをすることができる。
人間関係をつくる力 他者とかかわり合い，自分や友だちのよさを認め，協働する姿	**互いのよさの認め合い** 互いに助け合って生活する	互いに支え合い、分かり合える友人を得ることができる。	他者に配慮しながら、積極的に人間関係を築こうとすることができる。	友達と協力して、学習や活動に取り組むことができる。	友達の気持ちを考えることができる。
	よりよい人間関係の構築 思いやりをもって生活する	他者の価値観や個性を理解して、それを受け入れて活動することができる。	お互いの立場を理解し、チームを組んで互いに支え合いながら活動することができる。	思いやりの気持ちを持ち、相手の立場に立って考え行動しようとすることができる。	友達と仲良く遊び、助け合うことができる。
自己を見つめる力 ありのままの自己を見つめ，新たな価値を創造していく姿	**自分の成長の自覚** 自分で考え、自信をもつ	自己の思いや意見を適切に伝え、他者の意思等を的確に理解することができる。	自己の個性や興味・関心に基づいて、よりよい選択をしようとすることができる。	自分のやりたいこと、よいと思うことなどを考え、進んで取り組むことができる。	自分のことは自分で行おうとすることができる。
	なりたい自分の想像 自分のよさを知り、自分に合った役割を果たす	学校や社会において自分の果たすべき役割を理解し、積極的に役割を果たすことができる。	自分の役割やその進め方、よりよい集団活動のための役割分担やその方法等を知ることができる。	係活動などで自分のやりたい係、やれそうな係を選ぶことができる。	係や当番の活動に取り組み、それらの大切さを知ることができる。
3年間で目指す大まかな推移					

令和元年度　ＫｅＣｏＦｕ推進協議会確かな学力グループ報告書

◎　メンバー構成

	幼稚園	小学校	中学校	特別支援学校
研究	大和田祥加	◎野口　卓也 高玉宏太郎	車田　和樹 菅野　江美	本間　久登 池田　幸浩 鈴木　拓巳
国語・算数数学		今野　智功 品田あかね 矢野　　浩 三星　祐輔	◎甚野　隆洋 鈴木　悠介 上野　友寛	佐藤明希子 高玉　聡史 今野沙緒里
社会・理科		加藤　　怜 植木　忠佑 板倉　正哉 沢　　貴史	小松　拓也 関本　慶太 ○原　　理沙	齊藤　香澄 佐藤　由佳 中村　　誠
外国語		力丸　　愛 梅宮和喜子 大和田智子	仲江川友美 ○小林　一人 柏倉　侑奈	篠田　好美 佐久間紗和子
音・図・家・体		福本　拓人 三瓶　　孝 鳥居　　綾 髙橋今日子 佐藤　文江 益田　憲幸	坂内　俊介 廣川　　豪 ○遠藤　真希 千葉はづき 赤沼　健一	大和田聡子 川名　瑞穂 増子　弘晃 梅原真智子 尾形　徳洋

１　具現化計画における本グループの取組内容

（１）令和２年度から完全実施される学習指導要領の趣旨や本県の教育的課題，各校の実態に基づいた研究の企画・運営を行い，情報共有する。

（２）各校園の研究紀要の在り方を見直し，より発信力のある研究紀要に改善する。

２　グループの目標・方針等

（１）各校園が独立した存在ではなく「チーム福島大学附属」としての気概をもって連携に取り組む。

（２）メールのやりとりや電話連絡等を中心とした「ゆるい連携」による情報共有や教材研究を行うことで，各地域の学校園のモデルとなるように努める。

（３）自分で自分の未来を切り拓くことのできる「附属校園で学んだ１５歳の姿」を目指す。

（４）地域のモデルとなる授業を発信する。

３　具体的な取組内容・方法等

（１）令和元年度に，各校園の紀要の在り方を見直す。それにより，これまで以上に地域の学校園へ発信力のある紀要にできるよう，大学と連携しながら内容の修正・改善を行う。

（２）メールや電話を活用し，各校園の研究の進捗状況や日々の教育活動の紹介等を行い，各校園の研究や教育活動に取り入れていくことができるようにする。

４　年次計画

教科	２９年度	３０年度	令和元年度
	構想期	実践期	実践期・評価期
研究			○各校園の紀要の見直し・作成 ○各校園の研究や教育活動における情報共有
国・数	○自校の実践計画の立案・実践	○授業実践 ○事後研究	○授業公開・相互参観 ○普段の授業の雰囲気を動画共有
社・理	○自校の実践計画の立案・実践	○授業実践 ○事後研究	○授業公開・相互参観 ○事後研究等においてルーブリック評価を活用
外国語	○情報交換・課題の共有	○授業実践 ○事後研究	○授業公開・相互参観 ○「目的・場面・状況を意識した授業づくり」を小・中で共通実践
技能系	○情報交換・課題の共有	○授業実践 ○事後研究	○授業公開・相互参観 ○それぞれの教科で振り返りを実施 ○ルーブリック評価表の活用

５　今年度の計画

月	時期	グループでの取組内容・方法・プロセス等	
		研　究	各　教　科
7	構想期	○各校園の現状の共有・取り組みの方向性の確認	
8			○公開授業準備
9			
10	実践期	○研究紀要の見直し・改善案の検討 ○改善案を踏まえた研究紀要の作成	○特別支援「実践研」（9 月～10 月） ○音楽科「東北音楽研究大会（11/7） ○小学校「秋のオープン研」（11/11～11/13） ○中学校「秋の公開」（11/15～12/13）
11			
12		各校園で情報共有をしながら進める。	
1	評価期		○活動報告作成（1 月中）
2			○活動報告集約・まとめ（2 月中）
3		○研究紀要の完成・内容や構成の確認	

６　今年度の取組の実際（研究グループ）

今年度は「研究紀要の在り方の見直し」と「大学・附属四校園とのゆるやかな連携の在り方の模索」を視点として，各校園で研究推進をしたり，情報共有をしたりしてきた。以下に，各校園での活動経過を示す。

（１）　研究紀要の在り方の見直しについて

＜附属幼稚園＞

※　研究紀要を作成していないため，実施しなかった。

＜附属小学校＞

○　紀要の構成の変更
- ２段組
- 引用文献・脚注の挿入

○　大学の先生（研究協力者）からの寄稿
- 授業実践に対する学術的背景の強化
- 大学との共同研究

●　リポジトリ掲載への様式整備
- そのための条件の確認が必要
- 長期的な視点で検討する必要がある

＜附属中学校＞

○　研究紀要の位置付けの確認
- 実践集録として作成

○　各教科等で書く内容については，研究の柱に沿って手立てと考察を書くように書式を統一

●　リポジトリ掲載への様式整備
- 書きぶり，論文調で書くための研修時間がとりにくい

＜附属特別支援学校＞

○　大学の先生方との相談
- 校長先生，岡田先生との連携

○　リポジトリ掲載に向けた検討
- これまでの形式のまま，リポジトリの規定に沿う形で作成する

●　リポジトリ掲載への様式整備
- 書きぶり，論文調で書くための研修時間がとりにくい

【成果と課題】

○　各校とも，これまで作成してきた研究紀要の在り方を見直すことで，作成する意図（何を発信するか，研究紀要の意味付けの明確化）や大学との連携を再確認することができた。

○　研究紀要の在り方を見直すことで，各校園の授業・保育実践を研究紀要に掲載するだけでなく，大学の論集や紀要に投稿して発信する方法についても検討することができた。

●　研究紀要を各教員の主観や思いだけで書くのではなく，学術的な背景も入れながら書くことに，先生方が難しさを感じていることが見えてきた。大学の先生方の指導を仰ぎながら，理論に裏付けられた授業・保育実践を積み重ねていきたい。

（２）　教育研究活動における情報交換・連携について

附属幼稚園 ✖ **附属小学校** ✖ **附属中学校** ✖ **附属特別支援** ✖ **大学**

◇　教育研究活動における情報交流，連携

◇　研究発信のための情報交流

附属幼稚園 ✖ **附属小学校**

◇　園児と１年生，２年生生活科での交流活動

◇　園児の疑問解決に向けた附属小学校教員の活用

附属幼稚園 ✖ **附属中学校**

◇　家庭科の授業における中学校３年生と本園幼児（年長、年中、年少）との交流活動

附属幼稚園 ✖ **附属特別支援学校**

◇　園児を特別支援高等部のカフェへ招待した交流活動

附属小学校 ✖ **附属中学校**

◇　互いの授業研究会（オープン研究会）における意見交流

附属小学校 ✖ **附属特別支援学校**

◇　各教科等における１学年児童と小学部の児童との交流活動

附属小学校 ✖ **大学**

◇　５学年総合的な学習の時間における，円盤餃子試食会の実施

◇　各教科等の授業に対し，定期的に指導を受けることができる「研究協力者体制」の実施

附属中学校 ✖ **連携強化のアイデア**

◇情報伝達手段としての「Ｇｏｏｇｌｅチャット」機能の活用方法の模索

【成果と課題】

○　各校園が「ゆるやかに連携する」意識をもつことで，日頃から各校園との連携を取り入れた教育活動を展開することができた。これは，子ども同士だけでなく，教師においても様々な学びの場になったと考える。

●　「全学附属学校」である利点を有効活用できていない実態がある。今後は，各校園の実態に応じて，理工学類や食農学類等をはじめとし，各学類との連携強化に努めていきたい。

7　今年度の取組の実際（各教科グループ）

（１）　小学校のオープン研究会，中学校の検証授業への参観

校種をこえて互いの授業を参観し合い，授業を通して育みたい資質や能力，指導方法等について協議を行った。

算数・数学科では，単元デザインの研究をすることで，単元を貫く課題設定や単元を通して育てる児童生徒の姿を見据えながら指導に当たった。

外国語グループは授業作りにおける共通実践として，具体的な場面や例を取り上げることで，課題設定において明確な目的・場面・状況などを意識し授業作りを行うといった取組を行っていた。中学校での外国語指導を見据えた，小学校での指導のあり方について考えられた。

理科では，同じ探究型の授業を行う附属小理科部の先生が授業作りについてのアドバイスをしたり，アンケートで授業を評価したりした。また，オープン研究会で資料等を理科部内で共有することにより，小学校での探究型学習の実践と成果について知ることができた。探究型の授業を行う教員同士の実践例をやりとりすることで，単元構想のヒントや附属小の生徒たちの思考などを学ぶことができた。

小学校のオープン研究会の様子

中学校の検証授業の様子

（２）サマーフェスティバル参加

７月に行われたサマーフェスティバルでは，小・中・特支合同で演奏するなど，音楽を通して交流を図った。

（３）あおい美術館

２月２１（金）～２８日（金）に開催する。附属校園の美術作品を展示する予定。

【成果と課題】

○　授業の相互参観によって，中学校としてはどのような児童がいるのか，どのような学び方をしてきているのか，といった実態を把握でき，中学校進学後の児童が感じるギャップを減らす対策を講じやすくなった。

○　サマーフェスティバルなど，学校行事での関わり合いができた。

●　昨年度と同様，教科グループでの連携では，小学校と中学校の関わりに比べ特別支援との関わりが弱い部分があった。授業の動画を共有するなどのアイデアは出ていたが，今年度実践することはできなかった。

●　児童生徒同士の交流の機会をもっと増やしていきたい。中学生が小学校や特別支援学校に訪問して学習や運動のサポートをすることで，よりよい関係性を築けられないか。（教科指導からは離れるが，中学校の文化祭や小学校のスポーツフェスティバルなど，学校行事を有効に活用したい。）

KeCoFu 推進協議会　豊かな心グループ実施報告書

【メンバー構成】

	幼稚園	小学校	中学校	特別支援学級
豊かな心Ｇ	遊佐　早苗	○小柳　　竣 荒　　篤徳 片寄　孝胤	◎古関由以子 川村　国央	篠木佐知子 三浦　志帆 佐藤　智明

１　具現化計画における本グループの取組内容

（１）幼・小・中，及び特別支援学校で実施している豊かな心を育むための実践を「豊かな心を育むための実践事例集」という形にして共有・蓄積する。

（２）道徳性に関する児童生徒等の実態や意識を調査することにより，重点価値を設定して，意図的・計画的に指導したり，全体計画の見直しを通して道徳教育の場を広く意識したりすることができるようにする。

（３）幼稚園，附属特支児童生徒との交流及び共同学習や，障がい者理解のための授業を検討する。

２　グループの目標・方針等

（１）自分で自分の未来を切り拓くことのできる「附属校園で学んだ１５歳の姿」の育成を目指す。
（自立した人間として他者と共によりよく生きる姿）

（２）新学習指導要領に基づき，自己を見つめ，多面的・多角的に考えることで，自己の生き方についての考えを深めることのできる実践を目指す。

３　具体的な取組内容・方法等

（１）２９年度は構想期，３０年度は実践期，令和元年度は実践期・評価期として重点化して取り組む。

（２）年度ごとに計画を見直し，それに基づき，各校が連携して実践を進める。

（３）自己を見つめ，多面的・多角的に考えることで，自己の生き方についての考えを深めることのできるような，実践に取り組む。

（４）道徳が教科化になったため，小・中の連携を見通して授業研究に取り組む。

（５）各校の連携を図るために，公開授業を中心に相互に授業参観および，意見交換を実施する。

（６）幼・小・中，及び特別支援学校との交流を進める。

４　年次計画

教科	２９年度	３０年度	令和元年度
	構想期	実践期	実践期・評価期
内容	○　体系的な指導内容と目標の構想 ○　豊かな心を育むための実践 ○　全体計画の見直し		
	○豊かな心グループの計画作成，検討	○全体計画の見直しと共有 ・道徳性に関する児童生徒等の実態や意識を調査 ・重点価値を設定	○効果的な指導方法と評価の検討 ・幼稚園，附属特支児童生徒との交流及び，共同学習や，障がい者理解のための授業の検討 ○実践の振り返りとまとめ ・これまでの研究の成果をまとめ，発信

５　今年度の計画

月	グループでの取組内容・方法・プロセス等
9	構想期 ＜効果的な指導方法と評価の検討＞
１０	
１１	実践期 ＜授業実践＞ ・授業実践と検討
１２	
1	評価期 ＜研究のまとめ＞ ・実践事例集の作成
2	

6　今年度の取組の実際

福島大学附属幼稚園

幼稚園は，道徳性の芽生えを培う時期であり，生活全体のあらゆる場面をとらえて幼児に道徳性の芽生えにつながるような環境構成を保育者が援助している。

（1）　飼育物とのかかわりに対しての保育者の意図

年長組の保育室では，ウサギを１羽飼育している。ウサギの世話は，義務的に仕事として行うのではなく生き物に関心をもち，可愛がる気持ちを育てていきたいと考えてあえて当番制にはしていない。保育者と共に生き物とかかわることで，命の大切さを感じ取り，動物を飼育することで責任について考える機会としたい。

（2）　実践事例「あっ，忘れた！どうしよう・・・」

４月は保育者から積極的に声をかけることで，いろいろな幼児がウサギの世話をかわるがわる行ってきた。ウサギの「ゆきちゃん」の存在によって，環境の変化になじめない４月の時期に，草をとってきてあげることが遊びになったり，友達とけんかした時にウサギをなでたりすることで気持ちを紛らすことができるものであった。

５月のある日，遊びに夢中になった幼児たちは，ウサギの世話をすることを忘れたまま降園時間になった。その時，「あっ！ゆきちゃんのお世話忘れた！」とＡ児が声に出した。保育者は，「そうだね、ゆきちゃん今日はご飯もらえないね。明日までお腹すくけれど，仕方ないね。」と声をかけた。Ｂ児は，はっとした表情でウサギにかけより「ごめんね。ごめんね。」と泣きながらウサギの頭をなでてその場を動かなかった。Ｃ児は慌てて降園の準備を済ませるとかごをあけて干し草を投げ入れた。ウサギが食べ出すのを見るとＣ児は安心した表情になった。保育者が降園時に「今日はウサギの世話を忘れてしまったけれど，どうしたらいいのかな？」と学級全体に問いかけると，「明日，すぐやる！」と口々に答えた。

翌日，登園後すぐにＢ児，Ｄ児，Ｅ児は自分たちで飼育かごを運び出し，世話を始めた。「今日から，忘れないからね、大丈夫だよ。」とうさぎに声をかけながら世話をしていた。

（3）　成果と課題

○　当番制にしないことで，世話を忘れることもある。しかし，その時こそ「生き物の命」や「責任」について幼児が考える機会とすることができた。

○　幼児なので，その後も忘れることはあるが，保育者が生き物の気持ちになって代弁したり，世話をしていないことに気づかせたりすることで，自分たちで世話をしようという気持ちになった。

●　積極的には世話をしたがらない幼児もいるので，「誰かがやってくれる」，「自分はやらなくてもいい」と思わないようにする必要性がある。

福島大学附属小学校

（１）　道徳科の研究授業の実施と積極的な公開

①　意　図

・　特別の教科道徳における附属小学校の取り組みについて，授業公開等を中心に積極的に発信する。

・　多くの方に参観していただき，事後研究会等を通して意見交換をすることにより，授業改善に生かすことができるようにする。

②　実　際

校内での実践授業とは別に，道徳の研究授業を積極的に公開した。各種研修会だけでなく「一緒に未来ある福島の教育を創るプロジェクト」の一環として，依頼があった際にも附属小学校での公開を行った。

	内容項目	教材名	参観人数
創るプロジェクト ９／１１	規則の尊重	黄色いベンチ	１人
創るプロジェクト ９／１８	節度・節制	かむかむメニュー	１人
常勤講師研修会 １０／３１	正直・誠実	さるへいと立てふだ	１８人
創るプロジェクト １１／８	礼儀	「あいさつ」っていいな	１人
小教研秋季研修会 １１／２５	親切・思いやり	ぐみの木と小鳥	３２人

③　成果と課題

○　事後研究会等を通して，道徳の授業について附属小学校が大切にしていることを発信するだけでなく，多くの意見をいただくことで，授業改善に生かすことができた。

●　意見交換をした内容等について，附属小学校内で十分に共有することができていない。普段の道徳の授業についての意見交換等も踏まえながら，学校全体としての道徳教育を推進していく必要がある。

福島大学附属中学校

（１）取組の実際

①　意図

・研究授業を行うことで「考え，議論する道徳」を実現させる。

・授業実践と平行して評価の在り方を研究する。

②　実際

６月の研究公開では，１・２学年で研究授業を行った。１学年は主題名Ｃ－１６郷土の伝統と文化の尊重，郷土を愛する態度　教材「よみがえれ！安波祭」（ふくしま教育道徳資料集　絆），２学年は主題名Ａ－１自主，自律，自由と責任　教材「ジョイス」（あかつき）を使用した。また，１２月の秋の授業公開では，３学年でＣ－１０公徳心「ベビーカー論争」（あかつき）を使用した。

資料を通して，物事を自分の事として考えたり，自分とは違う立場で考えたり，友達のもつ他の価値に触れたりするなど広い視野から考えた。

協議では「考え，議論する」授業を実現させるために大切なことや各学校で実践されている学習方法や評価方法について話題になった。

（２）成果と課題

○　意図的に話合い活動を取り入れることで，生徒は活発に意見を交流して友達のもつ考えに触れることができ，考えの多様性に気付き，道徳的価値を多面的・多角的に考えることができた。

○　教材に書かれている登場人物の行動や心情を自分ならどうするか考えたり，学校生活や実生活の経験を想起させたりして考えることができた。

○　授業での学びから，自己の生き方や社会の在り方などについて考えを深めることができた。

●　「考え，議論する」ための学習形態や教師の発問などの手だてを工夫すること，よりよい評価の仕方の研究をさらに深める必要がある。

福島大学特別支援学校

（１）小学部の取り組み　　附属小学校との交流会（小学部全児童）

①　ねらい

附属学校のつながりを生かしながら，障がいや学校の枠を越えて交流活動を行うことにより，児童の経験の幅や人とのかかわりを広げることができる。

月日	場所	対象学級	内容
１１／２１	附属小学校	１年３組	生活科「おもちゃまつり」
１１／２２	本校	１年２組	うんどう
１２／５	本校	１年３組	うんどう
１２／１０	附属小学校	１年２組	図画工作科「ぐるぐるアート」

② 成果と課題

同じ学級と２度交流の機会を設けたことで名前を覚えて自分から話し掛けに行くなどかかわりの広がりを感じる機会となった。よりかかわりを深めるためには活動内容の工夫が必要となることから，実施回数や内容を両校の教員で一緒に計画を進めていけると良い。

（２）中学部の取り組み　　尾瀬自然体験学習（中学部全生徒）

① ねらい

・ 尾瀬の動植物や雄大な景観を鑑賞したり，ガイドの方々による解説を聞いたりすることで，自然にかかわる楽しさを感じたり，美しいものに感動したりする豊かな心を育むことができる。

・ トイレの汚水処理やごみの持ち帰り，湿原に足を踏み入れずに歩くなどについて，体験を通して学び，自然環境を大切にしようとする態度を育むことができる。

② 成果と課題

実際に動植物などの自然に触れ合うことで，自然の美しさや自然を守り続けることの大切さを体感する機会となった。次年度も自然について学習する機会を設けていくなど，積み重ねを大切にしていきたい。

（３）高等部の取り組み　　学部一斉　道徳の授業（高等学部全生徒）

① ねらい

自己の生き方を考え，主体的な判断の下に行動し，自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を育むことができる。

② 成果と課題

学部全体で授業をすることで，道徳的価値を共有することができた。小グループに分かれて自分たちの意見を交換することで，自分以外の考えに触れることができ，互いを認め合う機会となった。生徒の内面に根ざした道徳性の育成を図るために，生徒の障がいの状態および発達段階，特性等を把握し，抱える課題や発達段階ごとにグループ分けをするなど，様々な学習形態を今後工夫していきたい。

7　これまでを振り返って

夏期研修会では，小・中学校で実践された学習指導案を基に協議が行われた。小・中学校の先生方からは，実際の道徳の授業での流れや支援の仕方、児童生徒の様子が発表された。また，幼稚園、特別支援学校の先生方からは，毎日の生活の中で行われる道徳教育の場面での指導や支援、学校全体での取組について発表された。四校園で子どもたちの姿や様子を具体的に話し合うことで，成長段階に応じて子どもたちの姿を長期的に見取る必要性を感じた。そのためにも，このような各学校の情報を共有する機会は重要であった。29 年度より計画された「豊かな心を育むための実践」を指導に生かし，自立した人間として他者と共によりよく生きる姿の育成につなげることができたと感じる。

KeCoFu 推進協議会　学習生活習慣グループ

【メンバー構成】

	幼稚園	小学校	中学校	特別支援学校
スタート カリキュラム		○栗原さゆり 矢内　丈博		山内　　淳 神村　　崇
学習・生活習慣		◎鶴宮裕一郎 斉藤　直人 星　　克	芳賀　　団 阿部　　哲	八巻　愛理 渡邊　裕子 阿部　真広
心身の健康	佐藤　友佳	○穂積梨映子 蓮沼　　茜	相模　由紀	堀部　聖華 廣居美貴子

1　具現化計画における本グループの取組内容

（1）学習・生活習慣の定着

①　附属幼・小（低学年）の教員が連携して「スタートカリキュラム」を作成し，実行する。

②　学習の約束や家庭学習習慣について，附属小・中の内容・方法をすり合わせ，全教員が共通理解の上で実行できるようにする。

③　心身の健康を育てる生活習慣について実態を把握し，連携・継続して取り組む。

（2）インクルーシブ教育システムにおける合理的配慮や基礎的環境整備について検討する。

（3）ケース会議への支援（けやき相談員の在籍校訪問）

2　グループの目標・方針等

（1）幼児児童生徒が安心して学校生活を送ることができるとともに，望ましい生活習慣を身に付けることができるよう，附属幼・小・中の一貫性を持った環境を整え，学習・生活習慣の定着をめざす。

（2）附属特別支援におけるインクルーシブ教育システムやユニバーサルデザインの視点からの実践を，附属小・中での学習・生活指導に積極的に取り入れるとともに，附属特別支援の教員が，附属小・中の授業を参観することにより，児童生徒の困難さの軽減・解消を図るとともに，児童生徒にとってより学びやすい学習環境を整えることをめざす。

（3）新学習指導要領に位置付けられた「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」「スタートカリキュラム」について，附属四校園の連接・連携を図った実践を進める。

3　具体的な取組内容・方法等

（1）学習・生活習慣の定着をめざし，グループを『スタートカリキュラム』『学習・生活習慣』『心身の健康』の３チームに分けて活動を進める。

①　『スタートカリキュラム』チームは，児童が安心して学校生活に適応することができるための「附属小スタートカリキュラム」を計画し，実践を通して改善していく。

②　『学習・生活習慣』チームは，各校園における「学習の約束」「家庭学習の進め方」「生活習慣」等の指導内容や方法について，共通理解や連接を図るとともに，必要に応じて見直しや改善を図って実践を進める。

③　『心身の健康』チームは，児童生徒の心身の健康（体力向上，食育，性教育，情報教育等）の実態把握に基づき，四校園での連携・継続した指導内容・方法について検討し，実践を進める。また，各校園における学習・生活に困難を抱える幼児児童生徒への指導・対応について，ケース会議への支援やけやき相談員の在籍校訪問などを積極的に行い，指導の内容や方法についての工夫や改善の手掛かりとする。

（2）各校園において必要とされる合理的配慮や基礎的環境整備について，特別支援教育の分野から積極的に情報を提供し，具体的な見直しや取り組みを提案する。

4　年次計画

２９年度	３０年度	令和元年度
構想期 ・ 各校園間の課題共有 ・ 各課題に対する対策の模索	実践期 (ス) スタートカリキュラムの作成・実施 (学) 家庭学習の充実に向けての取組 (心) 朝ごはんに関する実態調査	実 践 期 ・ 評 価 期 (ス) 作成したスタートカリキュラムの実施 →各校園で検討・修正 (学) 各校園での取組実践 →各校園で検討・修正 (心) 実態調査とメディア指導 →各校園で検討・修正

5　今年度の計画

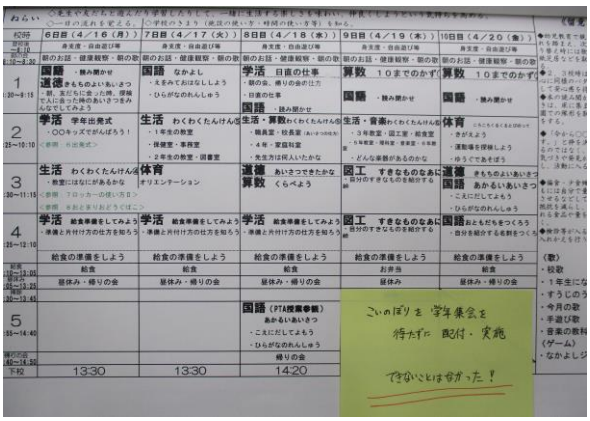
月		グループでの取組内容・方法・プロセス等		
		スタートカリキュラム	学習・生活習慣	心身の健康
7	構想期	スタートカリキュラム 小学校モデルの作成 （小学校案）		
8	構想期	夏季研修会 （附属小モデル提案）	夏季研修会 （今後の見通し確認）	夏季研修会 （今後の見通し確認）
9	実践期	実践・見直し	家庭学習の進め方・生活のきまりに基づいた実践	実態把握 学校医などの協力要請 実施，集計・分析 けやき座談会（～２月）
１０	実践期	実践・見直し	家庭学習の進め方・生活のきまりに基づいた実践	拡大学校保健委員会の準備
１１	実践期	実践・見直し	各校での振り返り	拡大学校保健委員会実施 拡大保健委員会だより発行
１２		各校園による検討	修正・改善	各校での指導
1		修正・改善	実践の振り返り	各校での指導 （メディア指導）
2	評価期	スタートカリキュラム 小学校モデル改訂版完成	今年度の反省	今年度の反省
3	評価期			

6　今年度の取組の実際（スタートカリキュラムチーム）

附属小学校で作成した「ＫｅＣｏＦｕスタートカリキュラム第２案」を実施し，時間割の見直しや新たなエピソードの更新を行ってきた。

（１）　時間割の見直し

一単位時間（45 分間）すべてを一つの教科等の授業に費やす場合もあれば，一単位時間を弾力的に扱って教科等を組み合わせて授業を行う場合もある。そのような時間割を基に，実際に授業を進めていく上で，その都度挙がる反省を付箋に書き込んで貼っておき，次年度への見直しに生かせるようにした。また，エピソードにあるような教育活動（写真では鯉のぼりづくり）が実施可能だったか，教育的な効果はあったかなどの観点で振り返り，反省を残しておくようにした。



（２）　新たなエピソードの更新

今年度，１学年では 10 月から 12 月にかけて，附属幼稚園の園児（昨年度から）・附属特別支援学校の小学部児童（今年度から）と一緒に遊ぶという活動を行った。その学習の計画の仕方や教育的効果について，エピソードにまとめて更新した。各種教育活動における目的や意義を明文化することにより，次の１学年スタッフが見通しをもち，かつ，ねらいを明確にしてスタートカリキュラムを実施できると考える。

＜18　生活科：いっしょにあそぼう＞　　時期：１０～１２月

学級の交友関係や２学年のペアとの関係が活発になってきた 10 月頃。「福島大学附属小学校」という名前から，母体である福島大学の確認をした。すると「附属小学校と附属幼稚園と附属中学校と…たくさん兄弟がいるんだよ」と話した子どもの言葉を基に，附属特別支援学校を紹介した。友だちが増えていくことに前向きになっている子どもたちは「特別支援学校の友だちのことが知りたい」「一緒に遊んでみたい」と思いを高めた。

一回は小学校でお祭り遊びや絵の具遊びを行い，一回は特別支援学校で運動遊びを行った。絵の具遊びでは，お互いのてのひらに絵の具を塗り合い一緒につくる楽しみを味わう子どもたちの姿があった。特別支援学校での運動遊びでは「がんばれ」「もう少し！」と声をかけ合ったり，手をつないで順番を待ったりしている子どもたちの姿があった。このような活動を通して「新しい友だちができたよ」「次は，いつ会えるかな」と楽しみながら身近な人々とかかわりを広げていた。

＜１年生の学び＞　幼児期の遊びや入学後４月からの外遊びを生かす。
新しい人間関係。相手意識の芽生え。

〈幼時期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿とのつながり〉
豊かな感性と表現
言葉による伝え合い
共同性

7　成果（○）と課題（●）

○　一単位時間を弾力的に扱うことができるような時間割，子どもたちが安心して自分らしさを発揮できるような教育活動とその効果についてまとめたスタートカリキュラムのおかげで，１年生が伸び伸びと学校生活を送ることができている。

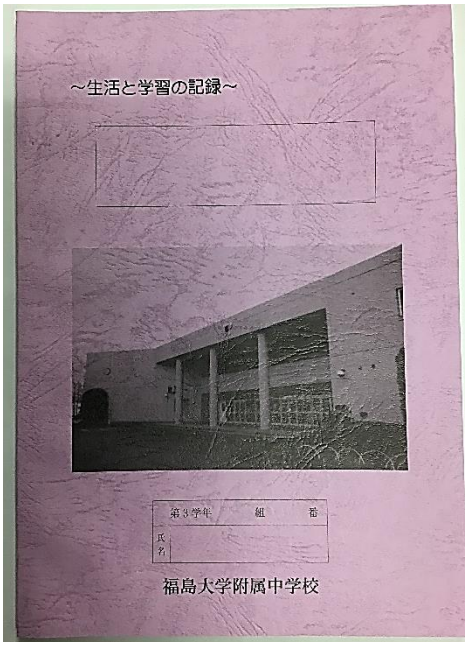
6　今年度の取組の実際（学習・生活習慣チーム）

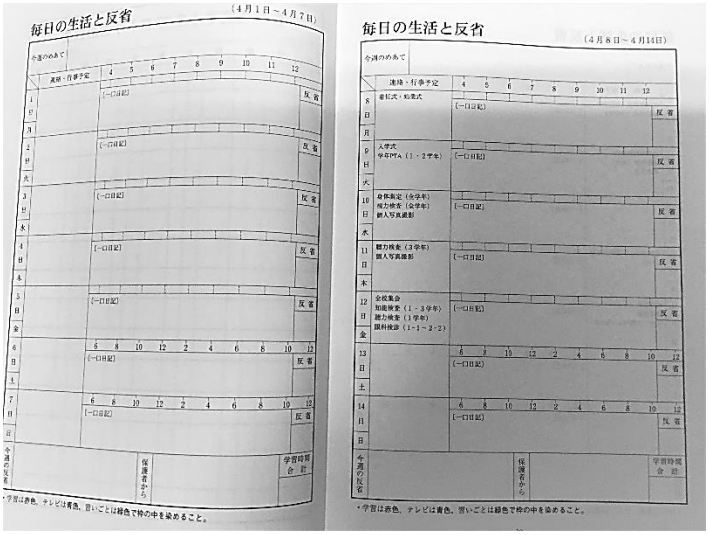
（1）　附属中学校の取組

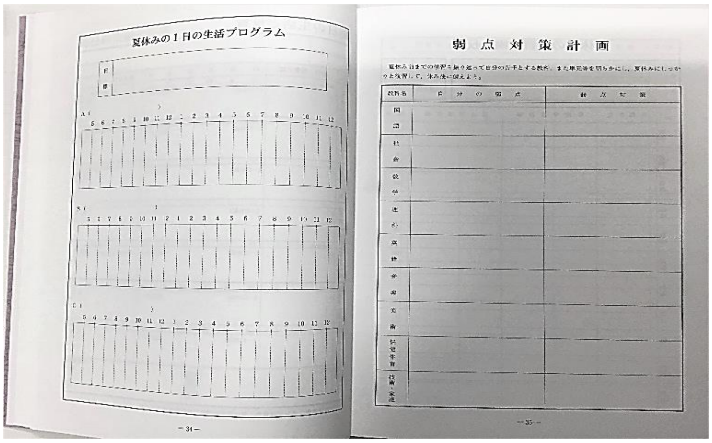
附属中学校では，生徒一人に一冊「生活と学習の記録」という生活ノートを配布している。週の目標や日々の生活記録，授業連絡などを記入することで，生活のムダ・ムラ・ムリがないか確認し，見通しをもって生活していけるようにしている。また，教科の連絡や行事を記入することで，忘れ物がないよう習慣化している。。

一日の学習時間の記録や定期テストの計画など，学習面においても計画と記録を生かし，学力の向上につなげる手だての一つになっている。

長期休暇には，一日の生活プログラムや弱点対策計画，学習計画と反省するページがあり，目標を明確にし，休業全体を見通した計画を立てることで，生活面と学習面の充実を図っている。







（2）　附属小学校での取組

①　低学年

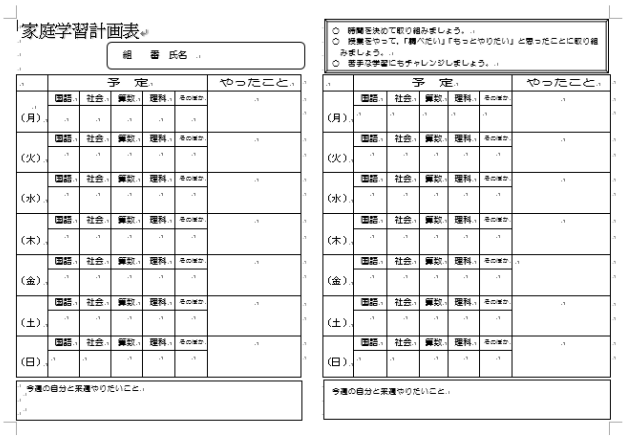
低学年では，各教科等の学びの基礎として音読を家庭学習に位置付けている。第１学年の子どもたちが学校生活に慣れてきた頃（６月頃）から音読の家庭学習を始め，これまで見守ってきた。授業中に大きな声で読むことができるようになった子どもや体や表情も使って読むことができるようになった子どもには，家庭でがんばっている音読の成果が出ていることを伝え，励ましてきた。忘れてしまった子どもには，休み時間に教師が音読を聞くようにし，毎日取り組んでいけるように繰り返し指導した。

１月からは，週末に作文を書くことも家庭学習に位置付けた。例年もう少し早くに作文の家庭学習を子どもに課すのだが，今年度は授業時間に十分書く楽しみを味わってから行うようにした。そうすることで，子どもが不安になることなく作文の家庭学習に当たることができている。今後も授業で紹介したり学年便りで紹介したりするなどして，子どもたちの意欲を持続させたい

② 高学年

高学年では，自己マネジメント力を高めるための計画表を作成し，家庭と学校が家庭学習の現状を見つめ直すことができるようにした。

○　学習の計画表に継続的に取り組んでいる。「予定」と「やったこと」に分けて記入し，振り返りができるようにした。家庭での学習時間の確保を軸にした生活を自分でマネジメントし，自分でよりよくしていこうとする力を育むことができるようにした。


家庭学習計画表

組　番　氏名

	予定					やったこと
	国語	社会	算数	理科	その他	
(月)						
(火)						
(水)						
(木)						
(金)						
(土)						
(日)						

今週の自分と来週やりたいこと

○　時間を決めて取り組みましょう。
○　授業をやって，「調べたい」「もっとやりたい」と思ったことに取り組みましょう。
○　苦手な学習にもチャレンジしましょう。

	予定					やったこと
	国語	社会	算数	理科	その他	
(月)						
(火)						
(水)						
(木)						
(金)						
(土)						
(日)						

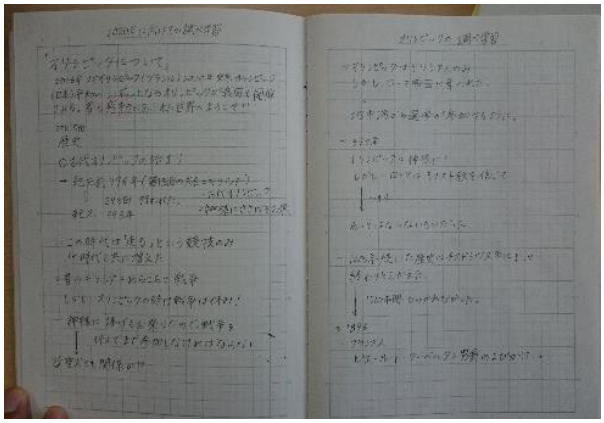
今週の自分と来週やりたいこと

○　学級で，自主学習に取り組んでいる子どもたちのノートを紹介した。量についてだけではなく，自分なりの課題に対して取り組んでいる内容について賞賛する機会を増やしたことで，意欲的に取り組む子どもが増えた。

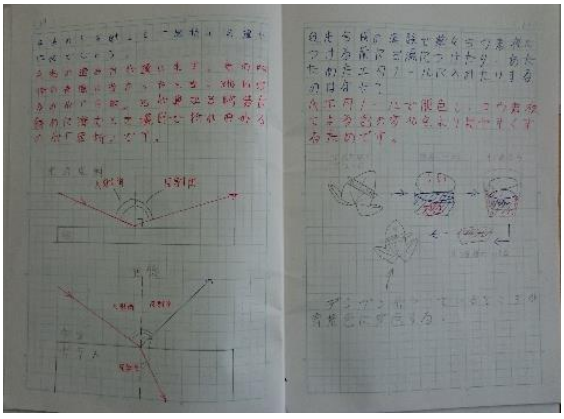
【自主学習ノート例】

・自分の興味があることについて調べ，追求する学習

オリンピックについての調べ学習

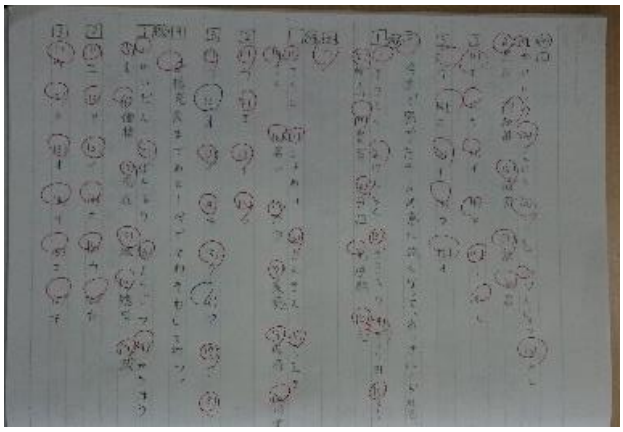


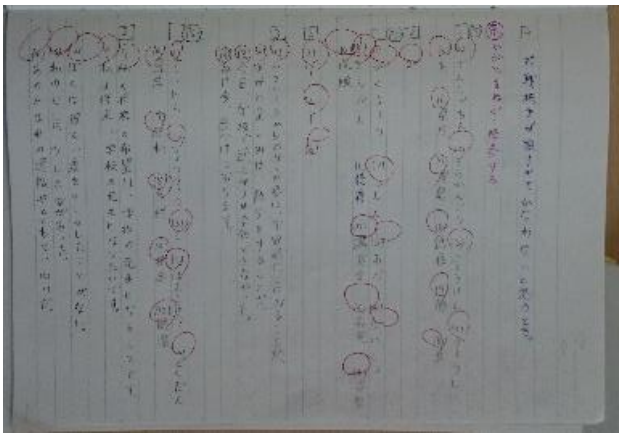
理科の授業にかかわる学習（中学校内容の予習も含む）



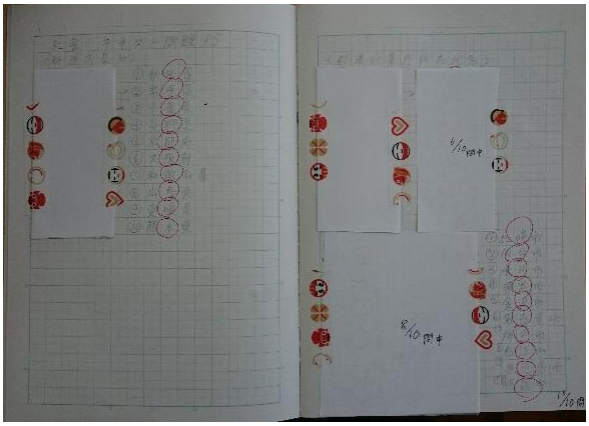
・問題集の問題を解き，ノートにまとめる学習

問題集に解答を直接記入するのではなく，ノートに記入していく。そうすることで，何度も問題を解くことができる。

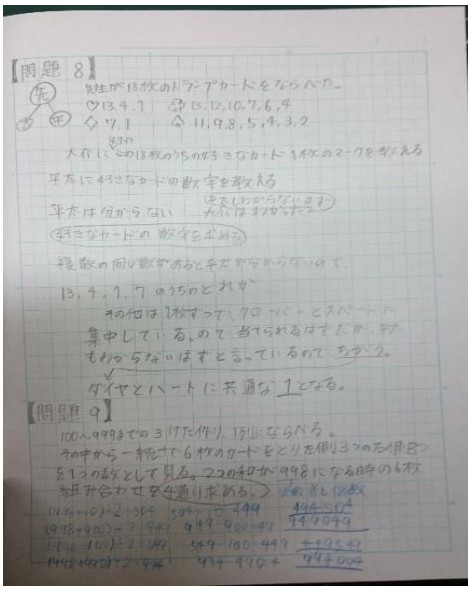




・解答を隠して自分の苦手を克服する学習
　一度解いた問題の解答を紙で隠し，さらに隣にもう一度解き直しをする。「８／10 問」などと記入し，振り返りを行う。



・授業の振り返りを自分なりにまとめる学習
　今日の授業を振り返り，ノートにまとめる。「先生が～という問題を出す」「○○くんが～という考えについて話す」など筋道を立て，どのように解いていったのかをまとめている。



（３） 附属特別支援学校
　高等部では、習熟度別にグループ編成を行い、スタディタイムとして国語と数学の内容の指導を行っている。学習内容の定着を目的として、月曜日の１時間授業を行い、その内容を毎朝 20 分間の授業と家庭学習で練習問題などを繰り返し行っている。
　また、学級では卒業後の進路や生活の自立に向けて、家庭で頑張ることを毎日の連絡帳に書き入れ、洗濯や食事の準備など家事の手伝い、パソコンのローマ字入力練習のために新聞の見出しを入力するなど、個別の課題や家庭生活に応じて取り組めるよう、学習以外の宿題や課題を行っている。

７　成果（○）と課題（●）
（１）附属中学校
○　全校生が毎日，生活や学習を記録し学級担任にノートを提出する。週のめあてを立て，一週間の見通しをもち，一日の振り返りをすることで，よりよい生活習慣を身に付け，夢の実現につながると実践してきた。生活ノートの活用を通して，生徒の学習状況や内面や変容など，生徒理解を深めるとともに，生活や学習の指導に生かすことができた。また，保護者からのコメントは，生徒，保護者，教師の連携にもつながっている。生活ノートを活用することで，進路など，自分で選択した目標に向かって，見通しをもって計画を立て，自主的に行動していく習慣が身に付いている生徒が多く見られた。

（２）附属小学校

○　低学年で「学習習慣の確立」，中学年で「学習習慣の確立と自分に必要な学習を選ぶ力の育成」，高学年では「自分に必要な学習を選び，やりぬく力の育成」をめざしてきた。段階的に指導していくことや，子どもの困り感に教師が進んで寄り添うことで「これならできそうだ」という気持ちをもつことができるようになった。

○　６年生では，１１月から中学校入試に向けて朝の学習の時間を確保している。７：４５～８：０５の２０分間，４教科のプリントに取り組む。また，入試までの間３回まとめのテストとして，実際の入試を想定して，１日４教科のテストを行った。自分の学習を振り返るとともに，家庭学習への意欲も喚起できた。

●　家庭学習の習慣については個人差が大きい。家庭との連携を図り，学年の系統性や発達段階を考慮しながら学校全体で取り組んでいく必要がある。

●　今年度から従来のドリルよりも量を少なくしたドリルを購入した。そのことについては，家庭からの心配の声が挙がった。学年集会等で理解を図ったが，家庭学習の意義については，保護者に対して改めて継続的に啓発していくことが大切である。

（３）附属特別支援学校

○　授業内容と家庭学習を連携させて、毎日取り組めるようにしたり、さらには買い物学習や話し合い活動など実践的な内容を組み合わせたりすることで学習内容の定着につながっている。また、家庭で取り組む事で本人の課題や取り組み状況を保護者にも理解してもらうことができたと考える。

●　家庭学習や課題の取り組みについては、保護者との連携も必要であり、どの程度の量、時間を確保できるかを確認しながら進めていくことが重要であると感じる。今後も目指す姿や身に付けさせたい内容を個別の指導計画で共通理解し、方法や内容を検討して進めていきたい。

６　今年度の取組の実際（心身の健康チーム）

（１）　ネットメディア利用の実態把握

【幼稚園】

使用したことがある	７６％
使用時のルールがある	５５％
ルールを守っている	９４％

利用時間の平均					
	30 分未満	30 分~1 時間	1～2 時間	2~3 時間	3 時間以上
平日	８９％	７％	２％	２％	０％
休日	８４％	７％	５％	２％	２％

【小学校】

使用している	８４％
使用時のルールがある	７６％
ルールを守っている	５９％

利用時間の平均					
	1 時間未満	1～2 時間	2~3 時間	3~4 時間	4 時間以上
平日	６５％	２０％	９％	３％	３％
休日	４３％	２９％	１２％	８％	８％

【中学校】

自分専用の機器を持っているか　（複数回答可）						
なし	パソコン	携帯	スマホ	タブレット	ゲーム	その他
４０人	５９人	７４人	１７０人	１５３人	１９２人	１９２人

利用時間の平均							
	接続なし	30 分以内	30 分~1 時間	1～2 時間	2~3 時間	3~4 時間	4 時間以上
平日	８％	２１％	２７％	２８％	９％	３％	４％
休日	５％	１０％	１７％	２３％	２４％	１１％	１０％

【特別支援学校】

	小学部	中学部	高学部
使用している	５７％	７３％	８２％

	小学部	中学部	高学部
使用時のルールがある	５０％	７３％	６４％

	小学部	中学部	高学部
ルールを守っている	７５％	７１％	６７％

利用時間の平均						
		1 時間未満	1～2 時間	2~3 時間	3~4 時間	4 時間以上
平日	小学部	４３％	２９％	１４％	１４％	０％
	中学部	２０％	３０％	３０％	１０％	１０％
	高学部	２９％	２９％	１４％	１４％	１４％
休日	小学部	３３％	１７％	３３％	１７％	０％
	中学部	２０％	１０％	２０％	０％	５０％
	高学部	１６％	１７％	２５％	０％	４２％

【四校園共通の課題】

○　幼少期からメディア機器への接触が始まり，利用時間は年齢が上がるにつれ長く，平日より休日が増えている。
○　利用上のルールがない，もしくはルールがあっても守られていない場合がある。
○　中学生になると自分専用のメディア機器を持つ子どもが多くなる。
○　長時間利用により睡眠不足になり保健室を利用する子どもも出始めている

↓

長時間利用が子どもの発育や普段の生活に悪い影響を与え始めているではないか

拡大学校保健委員会で学校と保護者の情報共有

拡大学校保健委員会

子ども達の健康課題について，附属四校園の教職員，保護者，地域，医療機関が連携し課題解決に向けて対応を協議することで子ども達の健康の保持増進を図る会議

① 実施日　１１月１１日（月）　１３：００～１４：３０
② 会　場　附属特別支援学校　けやきの家　多目的ホール
③ 参加者　学校医１名　学校職員１５人　保護者３８人　　計５４人
④ 内容
　○　実態報告
　○　講話　「スマホ・ゲームの長時間利用によるリスク」
　　講師：学校眼科医　丸子順子先生
　　講師：NPO 法人 りょうぜん里山がっこう　高野伸一 先生
　○　グループトーク
⑤ 事後指導
　○　保護者の意識調査　（資料１）
　○　講演の内容を受けた四校園共通の保健便りを作成し発行する（資料２）

（３）各校での取り組み
○　職員会議などで教職員へ健康課題と講話の伝達
○　メディア機器長時間使用者に対する保健室における個別指導の実施
○　メディアと健康に関する学習（6 年生対象，講師：高野伸一先生，2 月 20 日予定）

7　成果（○）と課題（●）

○　メディア利用の実態を調べることで，幼少期より保護者への啓蒙や子どもへの指導の必要性が明確になった。

○　講師を招いて専門的な講話を学校職員と保護者で確認することで，メディアの適切な利用の重要性を共有しながら確認することができた。

●　具体的な指導内容まで話合いを発展させることが難しかったため，校種間で系統性を確認しながら指導内容を共通確認していきたい。

●　推進されている ICT 教育と関連させて，正しい知識を伝えていけるよう学校全体で取り組む必要がある。

※　福島大学発達支援相談室「けやき」活用状況

「けやき」主催事業としての座談会を相談部の先生方を中心に実施している。発達障がいがある、または心配のある子供に関わっている教員、支援者を対象に話し合い、状況を整理していくことを通して、教員や支援者の心理的負担の軽減を図ったり、支援の新たな方向性を考えたりしている。

附属小学校、幼稚園から紹介されて「けやき」に来室した事例については、学期１回程度管理職、教務、特別新教育コーディネーターや、ほっとルーム担当者と、指導や支援方法、保護者とのかかわり方についてのケース会、授業参観を実施した。面接や行動観察、集団生活の様子、発達検査等から幼児児童の実態ふまえ、アセスメントを行い、今後の支援や指導に生かしてきた。

Ⅳ　まとめ

1　具現化計画の変更について

2　今年度の取組

3　次年度に向けて

Ⅳ　まとめ

1　具現化計画の変更について

昨年度は，附属四校園が目指す「社会に開かれた教育課程」具現化計画に基づき，各プロジェクトグループごとに取り組んできた。

- 平成２９年度　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　構想期
- 平成３０年度・令和元年度　・・・・・・　実践期
- 令和２年度　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　評価期
- 令和３年度　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　改善期

計画によれば，今年度は，昨年の実践を踏まえ，さらに実践を深める時期であったが，運営委員会等での話合いにより，計画を変更し，今年度を実践期（２年目）及びこれまでの取組の評価期とすることにした。主な理由は次の通りである。

- これまでの取組により，四校園の連携及び連接を十分に図ることができた。
- 他校園でどのような取組をしているのかを共有することができた。
- 「附属四校園で学んだ１５歳の姿」を踏まえ，各校園が児童生徒に対しどのような指導・支援を行えばいいのかを確認することができた。
- 昨今の働き方改革を踏まえ，四校園の新たな連携の在り方を模索すべき時期である。

2　今年度の取組

⑴　夏期研修会

今年度の夏期研修会は，８月１日（木）に附属中学校を会場に開催した。研修会は３部構成としたが，講演会及び協議Ⅰ・Ⅱとも得るものが多く，充実した研修会となった。

- 第１部　講演　　講師：福島大学副学長　三浦　浩喜　先生
  演題：国の施策等からみる附属学校園の現状と課題
  附属学校園の現状について具体的にお話をいただくとともに，今後の附属学校園のあるべき姿についてご示唆をいただいた。
- 第２部　協議Ⅰ　　プロジェクトグループごとに今年度の計画を立てるとともに，どのように実践していくかについて協議した。どのプロジェクトグループからも，昨年度の連携及び実践を踏まえ，さらに積極的に取り組んでいこうとする意欲を感じることができた。
- 第３部　協議Ⅱ　　福島大学の岡田　努　先生主導の下，プロジェクトグループごとに次年度以降の四校園連携の取組について協議した。今後の連携について，これまでの取組をさらに発展させたいという意見が数多く出された。

⑵　プロジェクトグループの取組

今年度の計画に基づき，各プロジェクトグループごとに実践してきた。例えば学力向上グループでは，授業参観の機会をこれまで以上に設け，授業を参観するとともに，事後研究会では授業づくりについて活発な意見交換を行った。詳細は，前項Ⅲ「プロジェクトグループ活動報告書」を参照されたい。

3　次年度に向けて

附属四校園では，社会に開かれた教育課程の実現に向け，各校種間で連携を図りながら，教育活動の見直しや校内体制の改善に取り組んできた。これまでの計画に基づく KeCoFu 推進協議会での取組は今年度が最後になるが，今後は，これまでの取組の成果と課題を共有しながら，各校園の教育活動のさらなる改善・充実に取り組んでいく必要がある。